

しもおおたかであと  
0859 下太田館跡 鉢田市下太田 現況：山林

地図 44

下太田館跡は、潤沼に注ぐ大谷川右岸の舌状台地突端部標高約26mのところに所在する。潤沼まで約700mで、対岸約600mのところに天神山館跡(0860)が、北側約500mのところには大館(0475)・小館(0474)が位置する。

曲輪は、北東側台地基部に堀切を配し、台地基部と主郭を結ぶ土橋が南東に設けられている。主郭の三方は横堀で囲まれ、その周りに腰曲輪を配する。耕作によって、かなり削平されたり、堀が埋められたりして、本来の形状は失われている。

城主等は詳細が分からず不明である。  
(内田)



下太田館跡縄張図 余湖浩一 2003.12 (『続茨』より転載)

てんじんやまたであと  
0860 天神山館跡 鉢田市箕輪 現況：山林、畠地

地図 44

天神山館跡は、潤沼に注ぐ大谷川左岸の台地東側の標高約22mのところに位置する。

館があつたとされる台地の東側は土砂採取のため湮滅しているが、西側及び南側に低い土壠状の遺構が残っている。西側の土壠はL字状に曲がって北側に延び、南側の土壠は西側の土壠と交差する地点から南へ延びる。昭和22年ごろの空中写真を見ると、西側土壠と反対方向に逆L字状に延びる土壠状のものが確認でき、この土壠のあたりから東側が土砂採取で湮滅していることから、館の規模は、南北幅は不明であるが、東西幅は約80mの規模と推定できる。

城主等は詳細が分からず不明である。  
(内田)



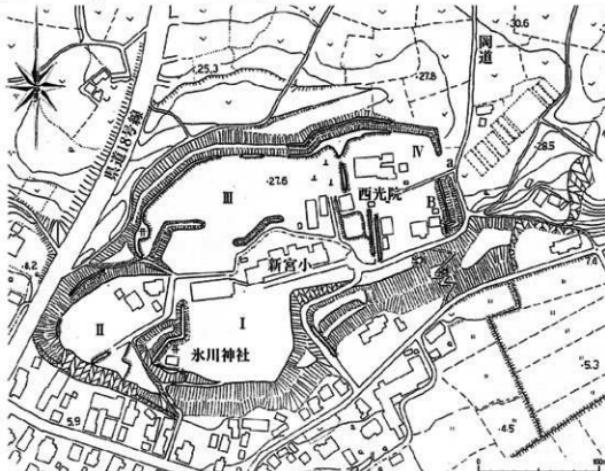
天神山館跡縄張図 岡田武志 2021.3.30

烟田城跡は、鉢田川と巴川が合流する左岸の台地南端部の標高約26mのところに位置する。

小学校（現在廃校）やお寺などがあり、小学校の改変とともに地形も手が加えられ、現在明確な城郭遺構は、小学校校庭跡の西側に鎮座する氷川神社近くの土壘と空堀のみである。この小学校跡部分が主曲輪で、その西側に曲輪II、主曲輪の北側に曲輪III、その東側に曲輪IVがあったと考えられる。虎口は、西光院の東側にあったとされ、その南側にも小さくクランクする土壘状のものがあり、そこも虎口と想定されている。曲輪III・IVの北側は二重の土壘で囲まれ、北側の侵入に備えた造りとなっている。

烟田城は烟田氏の居城であり、築城年代は不明である。烟田氏は、徳宿秀幹の三男朝秀が天福2年（1234）10月、父から烟田、大和田、富田、生井澤の4か村を譲られ烟田氏と称した。「烟田文書」「烟田旧記」などの古文書からは、文和4年（1355）に足利尊氏勢に加わり京都で南朝方と戦っている。文明18年（1466）に江戸通雅が徳宿城を攻めると、烟田入道は徳宿氏へ加勢するが城は陥落し、烟田氏の息子3人も討ち死にする「徳宿・横山合戦」がおこり、烟田入道は和睦を申し入れ許されるが、没落し、烟田に戻って本格的に烟田城を築いたのは天文7年（1538）である。烟田通幹は、天正18年（1590）には小田原攻めに佐竹氏に従って参陣したが、翌年の「南方三十三館の仕置き」により佐竹義宣に誘殺される。烟田城は徹底抗戦するも佐竹勢に攻められ、落城し、烟田氏は滅亡した。

また、烟田城のほかに、富士山館（0862）・塙館（0863）・母貝館（0878）・馬場館（0864）・大樋上館（0882）・金色館（0881）・勧請地館（0880）・龍ヶ谷館（0879）の8つの館があり、いずれも烟田氏世臣の塙氏によって築かれたものである。（内田）



烟田城跡縄張図 岡田武志 2005.3.31(『改茨』より転載)

ふじやまやかたあと  
0862 富士山館跡 鉢田市烟田 現況：山林

地図 60

富士山館跡は、烟田城跡(0861)の位置する東約600mの台地上標高約31mに所在する。

台地の先端部の地形に合わせたように土塁が巡り、南北約60m、東西が南側で約50m、北側で約30mの幅の台形状に築かれている。土塁西側の中央やや南寄りに虎口部分が配される。虎口部分入口西側には、土塁が築かれている。土塁の周りは帯曲輪状になっており、南側と東側の台地突端部分に腰曲輪がそれぞれ築かれている。

詳細は不明だが、烟田八館の一つで烟田氏の世臣である堀氏によって築かれたものである。(内田)



富士山館跡縄張図 岡田武志 2021.3.29

ばばやかたあと  
0864 馬場館跡 鉢田市烟田 現況：山林、畠地 別称：小高根城

地図 60

馬場館跡は、長茂川左岸の標高約34mの台地上に所在する。烟田城跡(0861)から北東方向に約1.2kmのところに位置する。

富士山館と同じく単郭構造で東西約80m、南北約90mの台形状に築かれている。北西・北東・南東にそれぞれ土橋状の個所があるが、これは、後世曲輪内が畠として利用されるようになった時に広げられたものであり、明確な虎口遺構は不明である。東側堀の中央部付近に土橋部分があり、また、堀に沿って低い土塁状の遺構があることから堀の内側に土塁が築かれ、虎口も東側土橋付近に築かれたものと考えられる。

馬場館跡も烟田八館の一つであり、堀氏によって築かれたものである。(内田)



馬場館跡縄張図 岡田武志 2021.3.29

さんかいじょうあと  
0865 三階城跡 錐田市安房 現況：山林 別称：安房城

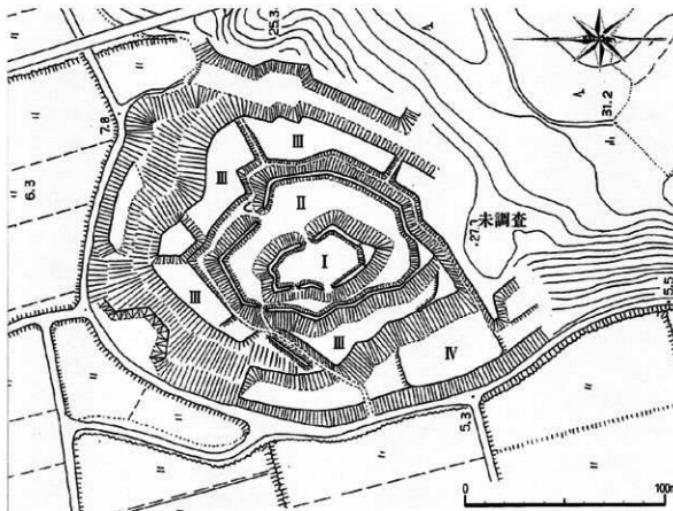
地図 52

三階城跡は、錐田川左岸の標高約28mの台地西端部に位置する。谷津を挟んで北側の台地には要害城跡(0875)が、東約700mのところには高野城跡(0874)が所在する。

三階城は、その名が示すとおり曲輪が3層に分かれている輪郭・階郭式の縄張りで、鹿行地区で主に見られる連郭式や単郭構造の城館跡とは異にする珍しい構造の城館跡である。北側から望むと3階状に見え、規模は大きくないものの立派な城館である。

曲輪Iは頂上に築かれた南北約50m、東西約25mの不正橢円形状に土塁が巡らされている。東側に虎口が築かれ曲輪IIへと続き、土塁南側にやや広くなる個所があり櫓台と考えられる。曲輪IIは、曲輪Iを囲むように配され東側にやや広く平場が造られている。曲輪IIの周囲には空堀が巡り、北東側に曲輪IIIに続く土塁が築かれている。曲輪IIIは堀切などで分断され、4つに区画されている。北側は櫓台があり、それによって曲輪が分断されている。東側は2か所の堀で分断され、外側に向って浅くなるため虎口と考えられる。この東側には非常に大きな堀が造られ台地と分断される。曲輪IIIの外側は切岸になっており、南西側に曲輪IVが配される。

三階城は、徳宿氏2代目秀幹が長子俊幹を安房に配し、安房氏の祖となり、この時に築かれたとされている。安房氏は応永年間まで続くが、上杉禅秀の乱に参戦し、討ち死にしたため滅亡した。その後、鹿島氏の老臣額賀大炊助が居城したとされる。(内田)



三階城跡縄張図 岡田武志 2005.4.5 (『改茨』より転載)

とくしゅくじょうあと  
0867 德宿城跡 錐田市德宿 現況:山林、畠地、神社 別称:龍替城 地図 52

徳宿城は、錐田川と鹿島灘海岸線との中間の鹿島台地上に築かれた丘城である。周囲の水田面からの比高は約21mを測る。錐田川の支流が侵食した大小5本の谷津を扼する半島状台地先端に位置し、広域な谷津田を支配かつ防備する城館だったと想像される。

台地先端部に主郭である曲輪Iを配した直線連郭式構造を持つ。曲輪Iは長軸約60mで、ほぼ全周を土塁で囲まれる。現在、内部は山林であるが、いくつもの神社が祀られ、討ち死にした城兵を弔う宝篋印塔一基が建立されている。南・西辺は広大な腰曲輪cで囲まれ、北辺ではcは堀Aと連続している。現在、台地基部の北方から曲輪Iまで一直線の通路で繋がっているが、これは築城のセオリーに反しており後世の所産とみられる。曲輪Iの本来の虎口はaの南側にある土塁の開口部でそこから堀Aに土橋を架けて曲輪IIと繋がっていたのではないか。この位置ならば、相横矢が掛けられ効率的に虎口を守ることが出来る。曲輪IIは曲輪Iの北側に位置し、東西に細長く湾曲した形をしている。東面に土塁が残る。ここに二か所突き出した部分があり、攻撃の拠点となっている。曲輪IIの北側に堀Bがあり、その北側に曲輪IIIが配置されている。堀Bは幅12mほどである。曲輪IIIは北面に低い土塁が残るもの、畠地として利用されかなり改変を受けており、旧状を留めていない。

鹿島氏の祖、鹿島成幹の長子親幹は鹿島郡都徳宿郷を譲渡され、それを本拠とし徳宿氏を名乗った。成幹の三男政幹は鹿島氏の家督を繼ぎ、六男頼幹は林氏の祖となっている。徳宿城は、徳宿氏歴代の居城となっていくが築城年代は不明である。文明18年(1466)、徳宿城主徳宿定幹の時、水戸城主江戸通雅が徳宿城を攻め徳宿合戦が勃発した。定幹以下一族郎党は討ち死にし、徳宿城は落城した。翌日、救援に駆け付けた鹿島・香取・下総の軍勢が樅山原で休息をしていたところ、そこへ江戸勢が急襲し激戦となつたが、江戸氏の勝利に終わった。(樅山合戦)以後、徳宿城が徳宿氏の手に戻ることはなく徳宿氏は九代にして滅亡した。(岡田)



徳宿城跡縄張図 西山洋 2004.11.29 (『改茨』より転載)

のとじょうあと  
0868 野友城跡 鉢田市野友 現況：山林、畠地 別称：要害

地図 59

野友城跡は、巴川右岸の標高約 27m の台地北端に位置する。

曲輪 I は南北約 100m、東西約 30m の長方形を呈し、西側と北側、南側は横堀で囲まれ、南西側には堀内部を樹形のような形状をしている。東側曲輪 II が配され、北側に登城道があり、その両脇に三重の堀が配されている。

野友城は、永禄 9 年（1566）、武田信房が鹿島治時と 3 か村を取り合って合戦となり、勝利し、この時に築かれたものと思われる。野友城を拠点として、北浦の水運の要衝であった当間の津を押える目的として築かれ、鹿島氏は対岸の鉢田の津を押えるために鉢田城を築いた。この争乱の後、当間の津は武田氏・鹿島氏の双方で支配することになった。（内田）

野友城跡縄張図 余湖浩一 2004.9 『改茨』より転載



こうやじょうあと  
0874 高野城跡 鉢田市安房 現況：山林

地図 52

鹿島台地の鉢田川流域近くの台地上に築かれている。台地上の突端部や辺縁部を利用している訳ではないので、平城に分類できる。西 600m には三階城（0865）がある。

曲輪 I だけの単郭構造で、ありがちな方形ではなく長辺が 70m ほどのおにぎり型で、全周の三分の二ほどが土塁で囲まれている。b の部分は破壊されている。曲輪 I の西側には堀の外側に土塁 A が築かれている。曲輪 I 南方に道を挟んで山林の中にも堀 C が穿たれている。さらに曲輪 I の北側には、谷津に向かって直線状の堀 D がある。なお、堀 D は敷が酷く測量器を持ち込んでの調査は出来ず目測での図化であり、正確性が低いことを記しておく。

歴史等については不詳であるが、要害城とともに三階城の支城と考えられている。事実、f の道を西進すると三階城に至り、縄張り及び地理条件から当城は三階城登城路を塞ぐ街道閉塞城郭であったと思われる。（岡田）



高野城跡縄張図 岡田武志 2021.4.12

ようがいじょうあと  
0875 要害城跡 鉢田市安房 現況:山林

地図 52

要害城跡は、鉢田川左岸の標高約31mの台地上に位置し、谷津を挟んで南側に三階城跡(0865)が所在する。

曲輪Iは、東西約100m、南北約50mで、北東側a、西側b、東側cにそれぞれ虎口を設ける。北東側は堀D・Fで台地と切り離されている。虎口bを降りると曲輪IIが配され、曲輪Iの南側に曲輪IIIが配されている。また、堀Dに並ぶように堀Eがあり、二重堀の可能性が指摘されている。

要害城は、文献等に記録されてはいないが、三階城の支城と考えられ、城郭構造から戦国末期に機能していたものと思われ、安房氏の後、額賀氏によって築かれたものと思われる。(内田)



要害城跡縄張図 岡田武志 2016.2.12 (『続茨』より転載)

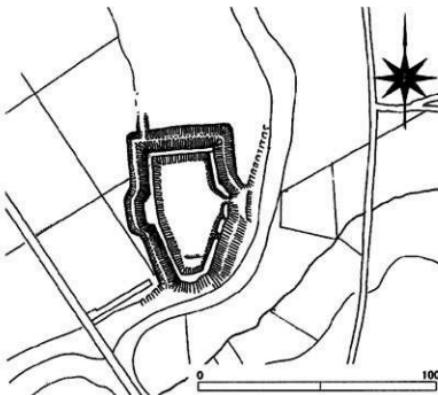
ほりのうちとりであと  
0876 堀ノ内砦跡 鉢田市青柳 現況:山林 別称:堀ノ内館、枡形

地図 51

堀ノ内砦跡は、巴川右岸の標高約26mの台地上に位置する。

東側と南側は崖になっており、東西40m、南北60mの不整長方形を呈する曲輪を土塁が囲み、西側と北側には浅い空堀が配されている。虎口は東側に設けられ、堀底を通路としていたと考えられる。西側の土塁中央部にはやや広くなる個所があり、横矢掛りと考えられる。

堀ノ内砦の詳細は不明であるが、砦の築かれた青柳の地は、木崎武田氏の勢力域であり、武田氏勢力範囲の北端を守るために築かれたものと考えられる。砦から南南東約950mのところに蕨巣(0877)、また南東約4kmのところに野友城(0868)があり、これらと北浦水運の要衝を押えていたものと考えられる。(内田)



堀ノ内砦跡縄張図 本間朋樹 2017.1.21 (『続茨』より転載)

わらびとりであと  
0877 蔵 岩 跡 鉢田市青柳 現況：山林 別称：蔵館跡、耕形山

地図 51

蔵岩跡は、巴川右岸の標高約25mの台地上に位置する。北北西約950mのところに堀ノ内蔵跡(0876)が、南東約3kmには野友城跡(0868)が所在する。

曲輪Iは、東西約30m、南北約20mの長方形を呈し、北側に低い土塁で仕切った曲輪IIを配する。曲輪I・IIの東側に出入口をもたない曲輪IIIが配されている。曲輪IIIは曲輪I・IIにかかり、曲輪I東にある虎口部分の防備的な機能を備えた構造である。南側と西側には横堀が巡らされ、西側の堀は北側で堅堀状となっている。虎口外側には小さな平場があり樹形を呈している。

蔵岩の詳細は不明であるが、堀ノ内蔵(0876)、野友城(0868)と合わせて永禄年間に木崎城を拠点とする武田氏が侵攻してきたときに築かれたものと考えられる。(内田)



蔵岩跡縄張図 速山成一 2017.1.21 (『続茨』より転載)

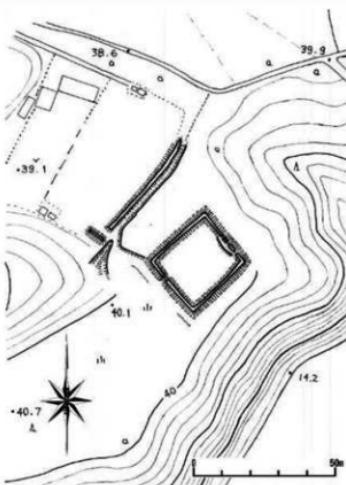
かなしきやかたあと  
0881 金色館 跡 鉢田市烟田 現況：山林

地図 60

金色館跡は、烟田城跡と同じ台地上に所在し、烟田城跡から北東約2kmの標高約39mの台地端部に位置する。

館は、25m四方で方形形状に土塁が巡らされている。虎口は西側に設けられ、北西側のやや離れたところに堀が配されている。この堀の南西側の傾斜地には堅堀とみられるものがある。土塁東側に2か所切られているところがあるが、後世の改変されたものと考えられる。

金色館は、烟田八館の一つで、北約300mのところに勧請地館、北東約700mのところに龍ヶ谷館(0879)が位置する。いずれも烟田氏世臣の堀氏によって築かれたものである。(内田)



金色館跡縄張図 冈田武志 2021.4.26

さいがどのやかたあと  
0884 雜賀殿館跡 鉢田市当間 現況：山林、宅地

地図 59

雜賀殿館跡は、巴川左岸標高約 21m の台地西端に位置する。西北西約 1.2km のところに蕨跡(0877)が、南南東約 2.2km のところに野友城跡(0868)が位置する。

曲輪 I は、南北約 75m、東西約 50m で南側と東側に土塁が巡る。北西隅に一段高い平場があり櫓台と思われる。東側に曲輪 II が配され、曲輪 I・II の間に堀が設けられ、この堀は南側で帶曲輪に繋がる。曲輪 I 南側には横堀が配され、その先に腰曲輪が配される。虎口は曲輪 I の南側、北東隅、北側に設けられている。南側の虎口からは、腰曲輪を抜けて台地下に下りる道が続き、登城口の可能性が考えられる。

雜賀殿館の詳細は不明であるが、雜賀氏に関連する館跡と推定されている。(内田)

雜賀殿館跡縄張図 岡田武志 2021.5.24



とみたじょうあと  
0886 富田城跡 鉢田市下富田 現況：山林、神社

地図 51

富田城跡は、巴川に面する標高約 27m の舌状台地上の、現在香取神社があるところに位置する。

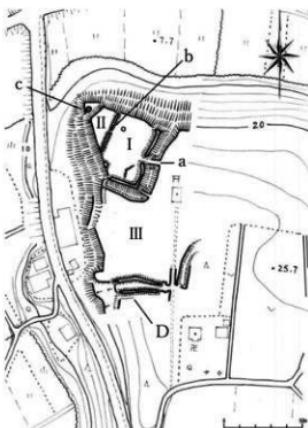
巴川の低地との比高差約 20m の北及び西の斜面を利用し、東と南は土塁と堀で区画された複郭構造を呈する。その規模は南北約 100m、東西約 50m の範囲に及ぶ。

主郭 I は台地の北西部に位置し、その西側が曲輪 II、東側が曲輪 III と考えられる。主郭の南と東を巡る土塁と堀は、最も深いところで約 5m に及ぶ。東側の堀の中央部には土橋 a がつくられ、その正面からやや北にずれた位置に、主郭と曲輪 II をつなぐ虎口 b が認められる。

曲輪 II の北西突端部には腰曲輪が造られており、巴川上流を意識した構造となっている。腰曲輪には窓み c がみられ、烽火台であった可能性も考えられる。

曲輪 III と台地基部を隔てる土塁及び堀 D は中途半端で、後世に破壊されたか築造途中で放棄されたものと考えられる。

なお、城主等の詳細は不明である。(加藤)



富田城縄張図 岡田武志、加藤千里、相澤桃子 2021.4.24

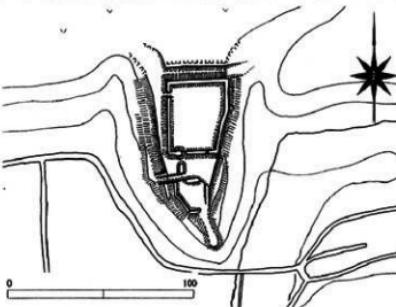
たけだじょうあと  
0887 武田城跡 鉢田市二重作 現況：山林

地図 60

武田城跡は、鹿島臨海鉄道大洗鹿島線北浦湖畔駅から北東約1.5kmの樹枝状に入り組む台地上標高約31mのところに位置する。

主郭は、南北約35m、東西約25mの不整長方形を呈し、土塁が四周する。北側に堀を配し台地と区画する。虎口は土塁西側北部に設けられ、南側台地先端部に土塁状の高まりで区画される曲輪の可能性のある平場が広がる。

武田城は、常陸國国衆の武田氏の居城と云われ、武田次郎左衛門尉が築城し、次郎右衛門信定、次郎右衛門尉就利、四郎右衛門信忠と城主が続いた。この武田氏は武田信玄の一族で、甲州騒乱の際に逃れ、鹿島郡司小久保七郎元従を頼りこの地に住むようになった。3代就利のときに佐竹氏に属したが、佐竹氏の秋田転封の際に秋田には移らず、当地にとどまり、信定の代には小見川領内田若狭守に属して、郡代郷役などを勤めたといわれる。(内田)



武田城跡縄張図 本間明樹 2017.1.21(『続茨』より転載)

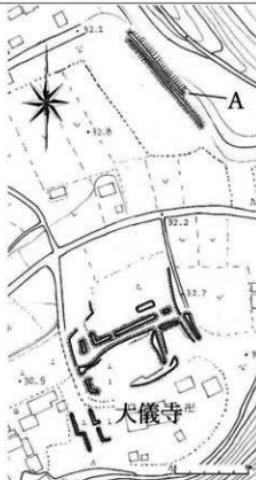
あだまじょうあと  
0890 阿玉城跡 鉢田市阿玉 現況：山林、畠地、寺院

地図 60

阿玉城は、鹿島台地の西辺縁部より北浦へ突き出した半島状台地上に築かれている。先端部より900mほど内陸に入った半島状台地中間部に位置する。比高は約27m。

大儀寺境内に比較的明瞭に遺構が残っている。しかし、これだけでは縄張りの全体像はつかめない。大儀寺本堂のあたりが主郭であったかもしれない。大儀寺より北方約200mに長さ80mの一直線の二重土塁Aがある。1947年撮影の空中写真を見ると台形の土塁状のものが写っている。Aはその一部分となっている。この台形状遺構と大儀寺境内の遺構が同一城館のものか、あるいは二つの城館であったのかは判断できない。

『大洋村史』には「中居時幹の第三子幹時が阿玉三郎と称して阿玉に住し地頭となった」とある。阿玉氏は初め阿玉館にいて、のちに阿玉城に移ったものか。(岡田)



阿玉城跡縄張図 岡田武志 2021.5.7

ふだじょうあと  
0891 札城跡 錐田市札 現況：山林、宅地、神社

地図 60

札城跡は、北浦に面する半島状台地の突端、標高約26mのところに位置する。

城域は南北に細長く直線連郭式の構造で、曲輪Iは一辺約45mの方形で北側の一部に土塁が残る。その南に堀を挟んで曲輪II、曲輪II東に「エトク屋敷」と呼ばれる小字があり、屋形の置かれた場所と推定される。その南に大規模な堀切りを以し曲輪IIIがある。また曲輪Iの北側には大きな土塁と豊堀で区画された曲輪IV配される。

札城は、常陸大掾氏の一族馬場繁幹がこの地を領し築いたとされる。その子、幹高より札氏を名乗る。天正19年(1591)「南方三十三館の仕置き」の時、札幹繁は難を逃れて小里村(常陸太田市)で蟄居したが、その15年後郷里に戻り病死し、札氏は滅亡する。(内田)

札城跡縄張図 岡田武志 2005.4.23(『改茨』より転載)



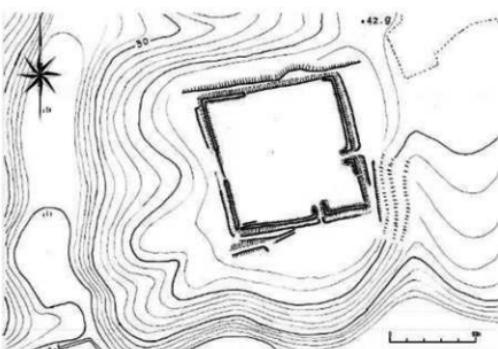
にしやまやかたあと  
0894 西山館跡 錐田市飯島 現況：山林

地図 60

西山館跡は、中居城跡から東北東約1.5kmのところの標高約40mの台地上に位置する。

単郭構造で、一辺75mの方形を呈し、四周を土塁が巡る。その外側に堀が巡らされていたと思われ、所々堀跡が見られる。東側の堀は、台地基部との区画をなし、この東側と南側に虎口が設けられている。

札城(0891)、中居城(0892)が所在する樹枝状台地の最奥部の位置に築かれている館であるが、城主等その詳細について不明である。(内田)

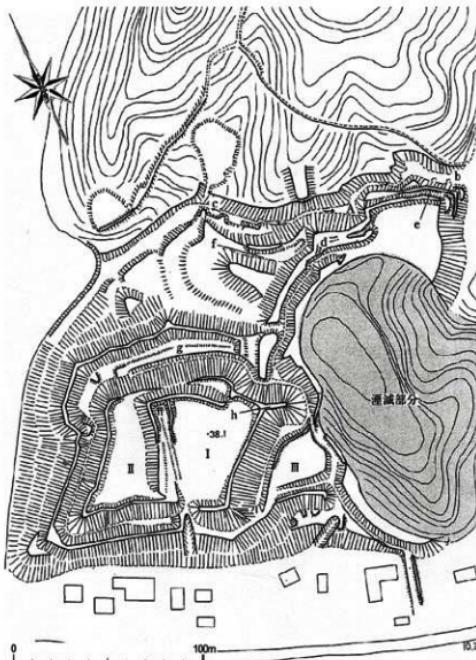


西山館跡縄張図 岡田武志 2021.4.4

中居城跡は、札城から東約 1.7km の樹枝状に入り組む半島状台地の突端、標高約 35m のところに位置する。

曲輪 I は南北約 60m、東西約 40m の逆台形を呈し、その西側に曲輪 II、東側に曲輪 III を配する。曲輪 I・II の周囲は横堀が巡り、最大で幅 20m、深さ 8m の大規模な堀である。この堀の北側部分には幅が広くなる個所がある。曲輪 I 南側の虎口から曲輪 III に続く通路があり、虎口正面には豊堀が掘られている。また、城域の北側には念仏堀と呼ばれる幅 20m、深さ約 10m の台地基部との切り離しを図った大規模な堀がある。この堀の東西の両端付近には城門を設けたと思われる遺構が 4 か所ある（b・c）。念仏堀の南側には 2 条の堀（e・f）が設けられ、d の平場が設けられている土壘と合わせて、念仏堀に侵入してきた敵に対する防衛機能を果たしたと考えられる。また曲輪 III 東側は湮滅し詳細が分からぬが、国土地理院の空中写真でみると昭和 50 年ごろまでは畠地として利用されており、曲輪状に広がる平場が 2 か所あり、この個所にも曲輪が存在していたと思われる。また、石崎勝三郎氏の研究によれば、この城域以外の周辺に計 11 本の土塁や堀が確認されており、周辺地形を巧みに利用した防衛線が築かれており、懸構的な様相であることが指摘されている。

中居城は、鹿島正幹の三男時幹が中居を領し、中居氏を称して築城されたとされる。時幹には幹絶、時家、朝幹の 3 子があり、時家は梶山氏、朝幹は阿玉氏として中居周辺を治めている。その後、「南方三十三館の仕置き」において中居城主秀幹は、一度は誘殺をされたものの、潜伏先の佐都（常陸太田市）で捕らえられ殺害された。中居の領民はその報を聞くと、壕掘り作業を中止して念仏を唱えたといわれている。この堀が念仏堀である。（内田）



中居城跡縄張図 岡田武志 2005.6.2 (『改茨』より転載)

あだまやかたあと  
0897 阿玉館跡 鉢田市阿玉 現況：山林

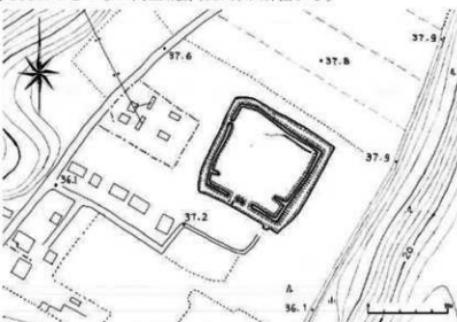
地図 60

阿玉館跡は、北浦に面する半島状台地の標高約36mのところに位置する。南南西約1.9kmのところに札城跡(0891)が、西約500mのところに阿玉城跡(0890)が所在する。

単郭構造で1辺50mの方形を呈し、四周に土塁が巡りその外側に堀が巡る。虎口は南西側に2か所あるが、どちらかは後世に改変されたものと考えられる。

また、この虎口のある土塁側の西側と東側にそれぞれ曲輪内に延びる土塁が見られる。

阿玉館については、城主等詳細は不明である。(内田)



阿玉館跡構張図 岡田武志 2021.2.25

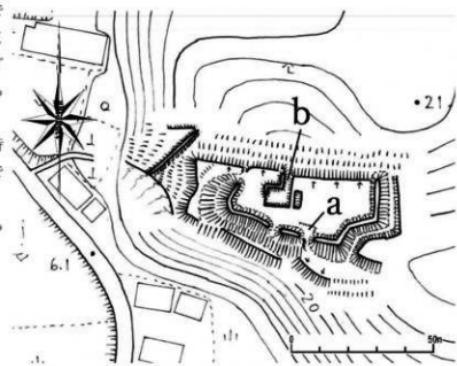
きんゆうやかたあと  
0898 金弓館跡 鉢田市下太田 現況：山林

地図 44

洞沼近くの鹿島台地、大谷川右岸の台地辺縁部に築かれた丘城である。比高は約22m。北760mに下太田城がある。

城域60m×40mほどのコンパクトな城館で、東西に細長い単郭の形式である。主郭は北辺を除いて土塁に囲まれ、台地基部にあたる東辺には横矢がけと堀を伴う。aが虎口で内枡形となっている。bも内枡形虎口に見えるが、本来の城郭遺構かどうか判断に迷う。曲輪北辺も破壊の感が拭えない。ここだけ一直線の塁線であること、他が土塁や堀で囲まれているのに対して50cmほど段差しかないので不自然である。コンパクトであるものの、枡形虎口や横矢がけ等、戦国時代末期の技術を投入した城館であることが言える。

歴史等については不詳である。(岡田)



金弓館跡構張図 岡田武志 2021.4.20

おうかじょうあと  
0900 相賀城跡 行方市根小屋 現況：山林、畑地、神社 別称：根小屋城

地図 67

相賀城跡は行方台地の東縁近く、雁通川が北浦へ注ぐ河口付近の半島台地上にある。比高は約29m。

半島状台地を利用した直線連郭式の城郭である。城域は長辺で約400mもある。先端部に曲輪Iを配しその半周以上を横堀で囲んである。この横堀はいくつも折れが入っており、技巧的である。曲輪Iの東側に堀を隔てて曲輪IIがある。曲輪IIの北側は横堀がありその延長は堅堀となって麓まで落ち込んでいる。曲輪IIを北上するといくつかの小曲輪と堀を経て曲輪IIIに至る。曲輪IIIの防御性は高くななく、曲輪面の削平も甘い。曲輪IIIの東側に埋められ浅くなった堀切がありその先が曲輪IVとなる。曲輪IVは長辺が240mもあり当城で最も広大な曲輪であるが、防御性は低い。

伝承等によれば、平安時代末期、大掾一族の逢賀親幹が逢賀城を築き、室町時代末期、手賀左近義元（相賀入道）が再建し、相賀城と呼ぶようになったとされる。また、同時期、佐竹義重の旗本、佐竹三郎四郎義元が再建したとする説もある。「和光院過去帳」にある天正19年（1591）に佐竹氏に誘殺された南方三十三館主メンバーに「アウカ殿」とある。この事件後、相賀城は廃城になったとみられる。（岡田）



相賀城跡縄張図 岡田武志 2005.5.23(改  
善)より転載)

0902 古屋城跡 行方市行方 現況：山林、畑地、宅地

地図 66



古屋城跡縄張図 青木義一 2017.2.12  
『続茨』より転載)

古屋城は、行方台地の西の縁近く舌状台地上に築かれた丘城である。霞ヶ浦に面しておらずやや内陸、霞ヶ浦湖畔より1.7kmほど東に位置する。谷津に突き出した形で、比高は約22m、南東1.2kmに小高城がある。

一辺100mの単郭形式で、見方によっては巨大な單郭方形館と見なすことができる。圧巻なのはその土壘の大きさで曲輪面からの高さは最大6mほどもある。西の隅は檜台状の張り出し、南の隅には折れが入れられより技巧的かつ攻撃的であり、単純な单郭方形館とは一線を画す。

歴史等については詳らかではない。西に隣接する曹源寺が下河辺氏の創建であることから下河辺氏の城とする説や、行方氏、小高氏の城とするものもある。技巧的と前述したが、選地に関しては軍事的緊張の高まった時期に築城されたものとは思えない。施行地区によく見られる古いタイプの単郭方形館にある中途半端な位置にあたり、地形を巧く利用したものではない。従って最初の築城は古い時代で、戦国末期に大改造されたものではなかろうか。（岡田）

あそうじょうあと  
0901 麻生城跡 行方市麻生 現況：山林、公園 別称：羽黒城

地図 73

麻生城は、行方台地の西の縁にある半島状台地上の丘城である。城下川が霞ヶ浦へ注ぐ河口付近でもある。比高は約23mで、城内からは霞ヶ浦が一望できる。その立地から霞ヶ浦の監視、麻生津の掌握、城下川流域の谷津田の支配及び防備等の機能を有していたと考えられる。

主要部は戦前より別荘や畠地として利用され、現在は公園となっているため保存状態は良いとは言えない。曲輪Iが主郭と思われるものの、あまりに広大なのでいくつかに分割されていたであろう。曲輪Iの東辺外側には長大な腰曲輪が構築されている。これは往時の遺構であろう。曲輪Iの西側、台地基部付近に非常に複雑な遺構がある。基本的には二重堀切なのであるが、その複雑さから縄張り解釈に苦しむところである。二本とも堅堀となって麓の常安寺まで落ち込んでいる。城内側の堀切はクランクして堅堀となっていてこの地方では珍しい遺構となっている。二重堀切より西側は城外となる。

平安時代末期、行方地方は常陸大掾氏の一族、行方忠幹が支配する地であった。忠幹の子景幹が元暦元年(1184)、屋島の戦いで討ち死にし、その所領は四人の子に分与された。長男為幹は行方氏の惣領を兼ねて行方太郎を称した。次男高幹は島崎を領し島崎氏を名乗り、四男幹政は玉造を領し玉造氏を名乗り、三男家幹は麻生を領し、麻生氏の祖となった。

この四氏を「行方四頭」と呼び、中世行方地方の中心勢力となった。麻生城の築城年代は判っていないが、麻生氏歴代の居城となっていく。戦国時代になると同族同士での抗争が激化し、天正12年(1584)麻生城主之幹の時、島崎城主で行方四頭の一人島崎安定に攻められ落城した。『新編常陸国誌』や『利根川図誌』では之幹は江戸崎城主土岐氏に逃れ、麻生城奪還のため霞ヶ浦を渡り島崎氏を攻めるが失敗したとする。また、『新編常陸国誌』によると、麻生城はそれ以前の天正8年(1580)に賊に夜襲をかけられたが城主之幹は防戦し撃退したとする。南方十三館の仕置き(1591)の際、島崎氏は滅亡し麻生城は佐竹氏の支配下になり、家臣の井間開義政(里見義弘の弟)が城主となったとされるが、詳細は不明。(岡田)



麻生城跡縄張図 岡田武志 2005.1.22 (『改茨』より転載)

しまなみじょうあと  
0903 島並城跡 行方市島並 現況：山林、寺院

地図 66



島並城跡縄張図 西山洋 2016.3.1 韓国の名が記されているので(麻生町史編さん委員会 2002)、その頃、島並氏が城主だった可能性がある。(岡田)

島並城跡は、行方台地の西の縁近くの半島状台地上に築かれた丘城である。霞ヶ浦に面してはおらず、やや内陸にあり、霞ヶ浦湖畔より東1kmにある。その半島状台地は台地基部部分が最も細く先端部に行くほど広がって谷津に突き出しており、城館の選地にふさわしい地形と言える。このネック部の地勢が低く、城内へ進むと下る感じになる。是心院境内一帯が城域となる。寺院や墓地となっているため、城館の南側の遺構は湮滅しているが、その北側は良く残されている。最も高所である曲輪Iが主郭とみられる。曲輪Iの西側には堀bを挟んで細長い曲輪IIがある。更にその西に二重堀があり、特に厳重な構えとなっている。

城主は島並氏と言われているものの、詳細は不明。島並町内の熊野神社にある棟札写に天正5年(1577)島並

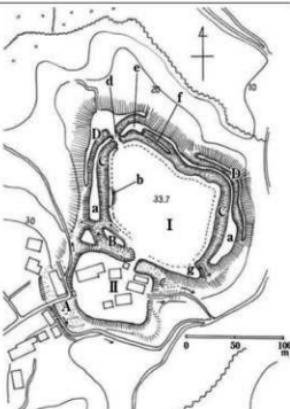
なかじょうあと  
0905 中城跡 行方市行方 現況：山林、畠地、宅地 別称：行方城、八甲城

地図 66

行方台地の西の縁あたり、霞ヶ浦近くの半島状台地上に中城はある。霞ヶ浦に直接面してはおらず、若干内陸部で、湖畔からは2kmほど東側にある。比高は約25m。南1.1kmに古屋城(0902)がある。

台地先端部に曲輪Iがあり、120m×100mほどの巨大なものである。あまりに広いのでいくつかの区画に分けられていたのではなかろうか。全周の四分の三ほどを横堀で囲まれている。曲輪Iの南辺に堀Bがあり土橋がかかり曲輪IIと繋がっている。堀Bは幅15mほどもあるが、浅くなってしまっており埋められているようである。曲輪IIは長辺70mほどでIに比べると小ぶりで土塁や横堀もない。台地基部との切り離しは堀Aによるが、こちらも幅広の割に浅いのでかなり埋められているようである。

一般的に中城は行方氏の祖、行方為幹が築城し、後に為幹はこの地を去り高に移ったとされるが、良質な史料がないため断定はできない。また、室町中期に船子城主下河辺義親が中城に移ってきたとされる。南方十三三館の仕置きで下河辺氏が滅ぼされると佐竹氏の家臣荒張尾張守が送り込まれ、佐竹氏の秋田国替えによって廢城となった。(岡田)



中城跡縄張図 青木義一 2017.4.2 『続茨』より転載

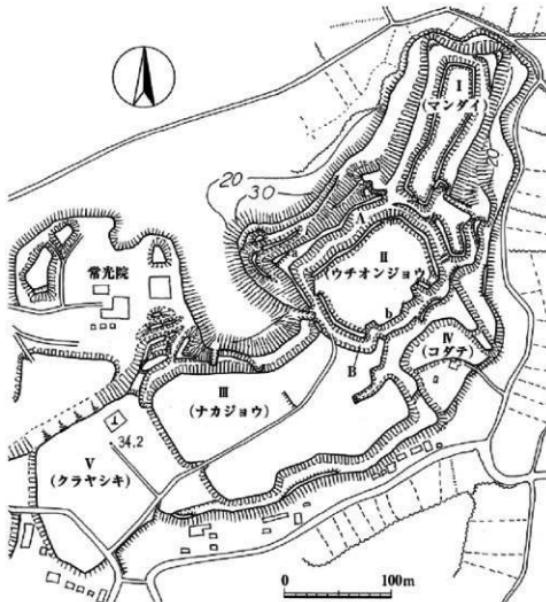
行方台地の西の縁近く半島状台地上に小高城は築かれている。霞ヶ浦に面してはおらず、その湖畔より 2.2km ほど内陸にある。谷津が大きく湾曲した部分に突き出した半島状台地を利用し曲輪を直線的に配置した直線連郭式の構造を持つ。城域は長辺で 500m ほどもあり比較的大きな城館で、比高は 22m ほどある。

台地先端の曲輪 I は小字地名「マンダイ」で、細長い形をしており全周を土塁、さらにその外側を腰曲輪で囲まれている。南の堀底と坂虎口で連結されている。曲輪 I の南西に堀を隔てて曲輪 II（ウチオンジョウ）がある。四分の三ほどを土塁と横堀で囲まれている。その西側は特に嚴重で三重横堀となっている。<sup>b</sup> b には横矢掛けがみられる。堀 B は幅 15m ほどもあり見応えがある。それをおいて南西側に曲輪 III（ナカジョウ）、曲輪 V（クラヤシキ）が並ぶ。両者とも耕作地となっているためか、遺構の残存は乏しい。曲輪 III の北西に常光院に突き出した部分は四重の堀切となっている。

平安時代末期、行方郡一帯を支配したのは大掾氏一族の行方景幹であった。彼の死後、その領地は四人の子供に分与された。長男為幹は行方氏の惣領を継いで行方太郎を名乗ったが、ちに小高に本拠を移

し小高氏と称する

ようになる。その時に居館としたものが小高城の前身にあたるものかは断定できないが、小高城は小高氏歴代の居城として続いている。天正 19 年（1591）の南方十三館の仕置きにおいて小高氏は滅亡し、小高城は佐竹氏の手に入り、家臣の北義憲ついで大山義則が城主として送り込まれた。慶長 7 年（1602）、佐竹氏の国替えによって小高城は廃城となつた。（岡田）



小高城跡縄張図 西山洋 2006.2.20 (『改茨』より転載)

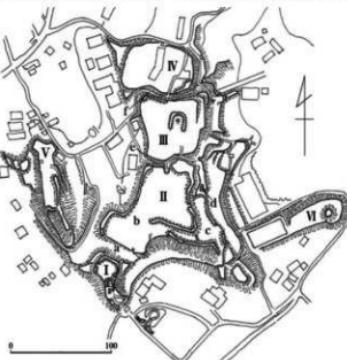
ふなこじょうあと  
0906 船子城跡 行方市行方 現況：山林、畠地、神社 別称：要害城

地図 66

行方台地の霞ヶ浦に面した半島状台地上に位置する。また、大きな谷津の入口でもある。比高は 26m。東西・南北ともに 400m もあり、かなり広大な城館である。半島状台地の形状は単純ではなく矢印のような姿をしている。

基本的には四つの曲輪を直線に配した直線連郭式城郭であるが、曲輪 II の両脇に曲輪 V・VI を置いている。曲輪 I は先端部にあり面積は狭いものの眺望がよく監視に適している。また、全体的に台地を徹底的に加工しており自然地形の部分が少ない。

一般的に、永享の乱(1438)で敗れた関宿の城主、下河辺義親がこの地に逃れ船子城を築城し、その後、義親は行方城に移り、船子城は小高氏のものとなった、とされているが、その出典が見当たらず、裏付ける一次資料もない。真相は不明である。中世行方地方において下河辺氏が一定の勢力を保っていたのは事実なので、船子城が下河辺氏築城であった可能性がないとは言えない。(岡田)



船子城跡縄張図 西山洋 2016.3.1(『続茨』より転載)

こやじたじょうあと  
0921 小屋下城跡 行方市麻生 現況：山林

地図 66

行方台地上の西側に位置するが、霞ヶ浦に面しておらず、湖岸より東へ 600m ほど内陸にある。城下川が侵食した谷津が二又に分岐する場所に立地する。周辺の水田面からの比高は約 22m。南西 1.6km に麻生城(0901)がある。

東西、南北とも約 70m のコンパクトな单郭の城館である。曲輪 I は方形に角を付け足したような形をしており、その角の付け根部分に虎口 a を設けてある。その角のお陰で横矢がかかるようになっている。曲輪 I の半分以上を本格的な横堀で囲んでいるが、南北側にはない。この横堀の底を通って虎口に至るよう登城路が作られている。

当城の歴史については不詳である。なお、当城の周辺に城下集落らしいものは見当たらない。当城の谷津を挟んだ台地上に小屋ノ内城(0912)、二本木城(0909)があることと、この広大な谷津を形成した城下川が霞ヶ浦に流れ込む場所に麻生城があることから類推すると、小屋下城、小屋ノ内城、二本木城は麻生城の支城かつ、広大な谷津水田を守るために城館ではなかろうか。(岡田)



小屋下城跡縄張図 岡田武志 2021.2.18

だいたやかたあと  
0922 代田館跡 行方市井貝 現況：山林

地図 66

行方台地の霞ヶ浦寄り、やや内陸に立地し、谷津内に突き出した半島状台地上に築かれた丘城である。比高は約25m。東方約500mに小高城(0904)がある。

城域は東西250m、南北90m、二つの曲輪を持つ直線連郭式の城館である。曲輪Iが主郭ではば全周を土塁で囲まれている。虎口はaで坂虎口になっている。bは虎口のように見えるが、砂利が敷き詰められているので後世の所産であろう。南端部には櫓台cがある。曲輪Iを守るように比較的大き目な腰曲輪dが構築されている。曲輪IIは半周ほど土塁に囲まれている。曲輪Iとは直線状の土塁で隔てられているが、通路のようなものはなく両曲輪の連絡は取りづらい。eは内折形虎口になっていて技巧的である。主郭の西側は標高が低くかつ居住性もないので、曲輪は設げず櫓台f・gを設置し西・南の敵に睨みを効かせている。

当館の歴史等については不詳である。谷津を隔てて指呼の位置に小高城があることから、小高城の支城であったことが考えられる。(岡田)



代田館跡縄張図 岡田武志 2021.2.22

やまだじょうあと  
0923 山田城跡 行方市山田 現況：山林、寺社

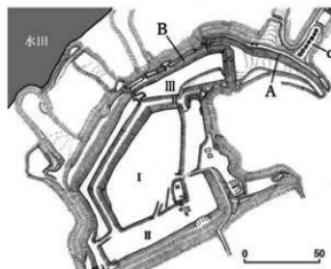
地図 67

山田城は、行方台地の東の縁にある半島状台地上にあり、また、そこは山田川が北浦へ注ぐ河口にあたる。北西3kmには木崎城がある。比高は30m。

主郭は曲輪Iで五角形の形状をしており南東隅に櫓台がある。北から南面にかけて横堀が回っている。曲輪Iの東半分を覆うように曲輪IIが、曲輪Iの北側には堀を経て曲輪IIIが配置されている。曲輪IIIの北側には長大な横堀A・Bが穿たれていて、当城最大の見所となっている。この横堀A・Bの底を通路としており、大手より侵入した敵は絶えず左右の頭上から攻撃を受けることになる。なお、横堀A・Bには所々堀内壁障壁が設けられている。大手筋にあたるcに直線的に七つの窓みが掘られている。これが城郭遺構かどうかは不明であるが、仮にそうだとともその

用途も不明である。

山田城の城主は山田氏であることは間違いないものの詳しいことは判っていない。山田氏は、行方氏一族で鎌倉時代初期より室町時代末期まで「古館」を本拠とし、戦国期には山田太郎左衛門尉治広が山田城に居城を移した（北浦町史編さん委員会2004）。(岡田)



山田城跡縄張図 余湖浩一 2014.12 〔続次〕  
より転載し一部加筆

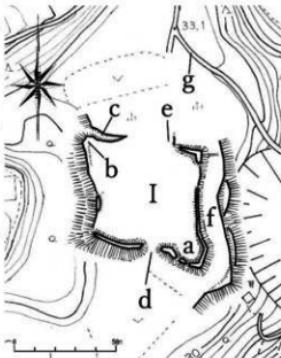
まえだてあと  
0925 前館跡 行方市山田 現況：山林、畠地

地図 67

前館は、行方台地の北浦側の縁近く、山田川の河口近くの左岸台地上にある。比高約30mの丘城で、東方約500mに山田城がある。

基本的には一辺50mほどの単郭方形館であるが、墨線は単純な四角形ではなく、角であるaとbに張り出しを設け横矢がけができるようにしてある。北辺は遺構が破壊されているが、cに部分的に堀が残存しており本来は土塁と堀のセットであったようである。明晰な虎口はdであり、eにもその残欠らしきものがあるので、2か所の虎口があったとみていい。東辺の外側にはfの平場がある。

当館についての歴史は不詳である。谷津を挟んで東方500mに山田氏の本城、山田城(0923)があることから山田城の支城の一つと考えられる。当館と山田城の間には現在県道2号線が通っているが、迅速測図を見ると古い街道はgの道になっている。この街道が中世まで遡れるかは定かではないが、仮にそうだとするとこの街道を扼するための城館であった可能性が高い。(岡田)



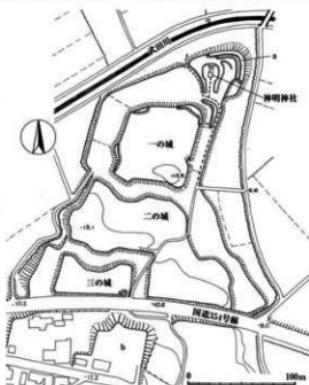
前館跡縹張図 岡田武志 2021.4.27

しんめいじょうあと  
0927 神明城跡 行方市両宿 現況：山林、水田、畠地 別称：武田城 地図 59

神明城は、行方台地中ほどよりやや東寄りに位置し、武田川右岸の半島状微高地に築かれた城館である。

直線連郭式の構造で曲輪は三つある。台地基部のあたりは国道354号線建設のため湮滅している。比高はわずか3~6mほどしかなく、鹿行地区の平均的な比高20m前後の直線連郭式丘城とは一線を画す。各曲輪を隔てる堀はその幅に対して浅く、埋められているようである。周辺は低湿地なので、本来は水堀ではなかつたか。同じ武田氏の築いた木崎城(0928)や野友城(0868)と比べると迫力に劣り古臭さを感じる。

上杉禅秀の乱(1416)のおり、甲斐武田氏は禅秀方に加勢し敗北し、当主信満は自害した。その弟信久は下総へ逃れさらに常陸国行方郡武井郷(行方市両宿近辺)に匿われ、武田氏が当地へ入部するきっかけとなった。神明城の築城時期は不明であるが、信久もしくはその子孫が創建しその居城としたものであろう。八代目の武田通信は天文2年(1533)木崎城を築き、居城をそこに移した。(岡田)



神明城跡縹張図 西山洋 2004.11.29 (『改茨』より転載)

きさきじょうあと  
0928 木崎城跡 行方市内宿 現況：神社、畠地、山林、工場 別称：武田城 地図 60

木崎城は、行方台地の東縁辺部、武田川が北浦へ注ぐ河口付近にある。武田川右岸の半島状台地上に築かれた丘城である。西北西1.7 kmに神明城（0927）がある。

半島状台地の先端に横並びに曲輪I・IIを配置している。改変のせいもあるが、両者の優位性の判断はつきにくい。香取神社のある曲輪Iと東に隣接する曲輪IIは堀Aと土塁で隔てられているがやや不明瞭である。両者の北辺と曲輪Iの西辺は横堀Bが穿たれている。曲輪I・IIの南側には曲輪IIIがある。神社入口付近に土塁と堀が残り、曲輪IIの南辺にも浅い堀Cがあるため、本来は堀と土塁で区切られていたと思われる。曲輪IIIは最も広大な面積を誇り、長軸で250mもある。曲輪IIIの南側は豪快な堀Dで一気に台地基部からの切り離しを図っている。長さ20mもある長大な土橋一本で曲輪IVと接続している。この土橋には正面と左右から攻撃できるよう、墨線に張り出しを作り相横矢構造としている。曲輪IVはいびつな三角形をしており面積は小ぶりで、東・西辺に土塁がある。虎口を守る小空間ということで馬出と似ているが、根本に出路が見当たらないので、本格的な馬出とは言えない。更に堀Eを経て平場gがあるが、国道354号線改良工事のため、大半が埋めている。発掘調査報告書（財団法人茨城県教育財團1996）ではこれを「馬出部」とし西側が開口部のコの字状土塁で囲まれた空間の図を掲載してある。これを見る限り、変則的な馬出であったようである。「馬出部」が城域の最南端となる。

天文2年(1533)、神明城々主武田信通は木崎城を築き、居城をここに移した(中山信名1893)。木崎城は神明城と比べると技巧、規模、土木工事量いざれもはるかに上回る。これは行方武田氏の発展ぶりのみならず、軍事力の増大も伺わせる。移転の理由の一つに北浦の津の掌握が挙げられる。「海夫注文」に武田知行分として「なるたの津」がある。「なるた」は行方市成田と比定され、木崎城と武田川を挟んだ対岸にあたる。おそらくは「なるたの津」防備のための城館ではなかったか。またこの地は武田川が北浦へ注ぐ河口付近にあたり入江状になっている。舟を集結させるには絶好の場所であり、武田水軍の根拠地としての機能もあったのではないかろうか。(岡田)



木崎城跡縄張図 逃山成一 2006.1.4 (『改茨』より転載)

おばたじょうあと  
0929 小幡城跡 行方市小幡 現況：山林、寺院、学校跡

地図 66

鹿行地区の城館の大半は霞ヶ浦、北浦に面する台地上に築かれているが、当城は珍しく行方台地の中間部に位置している。山田川右岸の台地上にある丘城で、比高は約22m。山田川を挟んだ対岸、東1.1kmに高岡城(0961)がある。

だいぶ湮滅が進んでいるので本来の姿を復元するのは難しいが、曲輪Iの北にある曲輪IIは曲輪Iよりも地勢が低く、曲輪Iと曲輪IIを隔てる土塁の北側に堀があったと伝承されており、曲輪Iの「箱の内」という地名からも観音寺がある場所曲輪Iが主郭とみていい。境内にa・bの櫓台のようなものが残る。cも櫓台であろう。曲輪Iの南側に曲輪IIIがあり墓地となっている。曲輪IIIの西側の斜面には城郭遺構が確認出来る。曲輪Iの北東の台地は現在畠地となっているが、「古屋」「古屋下」の地名があり北側斜面に城郭遺構と思われるものがある。曲輪IIの北側の集落内には、所々に土塁や堀の残欠がみられる。従って本来は南北800m、東西520mほどの大規模城郭であったと思われる。

『北浦町史』には、「寛正5年(1446)に玉造四郎正重の一族の六郎正忠が地頭として入部し、小幡氏を名乗る。(中略)この小幡氏一族が小幡郷を支配していく」とあり、当城は小幡氏の城館とみて良さそうである。(岡田)



小幡城跡縄張図 岡田武志 2021.2.12

うちじゅくやかたあと  
0932 内宿館跡 行方市内宿 現況：山林、宅地、寺院

地図 59

行方台地の東辺縁部より2.2kmほど内陸に位置し、武田川の左岸台地上に築かれている。館の東西は小規模な谷津が入っているので舌状台地と見なせる。比高は約23m。東800mには木崎城(0928)がある。

一般的な直線連郭式城郭は半島状台地軸線上に曲輪を並べるが、当館は半島状台地軸線に対し横並びに曲輪I・IIを配置している。これは武田氏の木崎城、野友城(0868)と共通している。主郭は東側の曲輪Iである。現在、両曲輪は自性寺境内となっているが、曲輪IIはかつて小学校が建設されておりかなり改変を受けている。曲輪Iは全周を土塁で囲まれ北辺は豪快な横堀で守られている。横堀を構成する土塁はcの付近で幅広となり小型曲輪のようになっている。

内宿館の歴史等については不詳であるものの、武田氏の居城木崎城、神明城(0927)の近隣であること、繩張りが木崎城に類似していることから木崎城を守る支城として見てよいのではないか。(岡田)



内宿館跡縄張図 岡田武志 2015.3.12 (『続茨』より転載)

おぬきじょうあと  
0934 小貫城跡 行方市小貫 現況：山林、畠地

地図 59

行方台地の内陸部、武田川左岸の舌状台地上に築かれた丘城である。比高は20mを測る。東南東約1.5kmに神明城(0927)がある。

曲輪Iがおそらく主郭であろう。現在は畠地として利用され改変を受けているが、昭和37年撮影の空中写真を見ると、a-b間に割と幅広の茂みがある。おそらくこれは堀跡と思われ、台地基部と遮断されていたらしい。曲輪Iは三方を豪快な横堀で囲まれている。北面は特に厳重で二重横堀と竪堀が構築され、エッジの効いた造構群はいかにも行方武田氏流域の雰囲気がある。

『新編常陸国誌』に「武田昌信ノ二子信次、武田源三郎ト称ス、康正元年(1455)、小貫皆ヲ築テ此ニ居ル、二子信重、小貫源二郎ト称ス・・・」とある。武田川流域には武田氏関連の城館が多く築かれており、小貫城は最も西に位置する。従って武田領西端の境目の城ではなかったか。(岡田)



小貫城跡縄張図 岡田武志 2021.3.20

てがじょうあと  
0938 手賀城跡 行方市手賀 現況：山林、畠地

地図 59

行方台地の西辺縁部、半島状台地上に築かれた丘城である。辺縁部というものの、若干内陸側に位置する。比高は約26m。北方630m、隣の台地に鳥名木館(0944)がある。

台地先端部に曲輪Iがある。120m×60mほどの長方形で北・西・南面は腰曲輪で囲まれている。北側は横堀が穿たれている。曲輪Iの東側、台地基部との接続は三重の堀切で隔てられている。ここは当城の見所で堀底から土壘を見上げると圧巻である。そのエッジの銳さは往時の姿をそのまま残しているようである。

手賀城より北東950mに当城が立地する半島状台地のネック部があり、そこに街道閉塞用堀切(手賀新堀堀切(K138))があった。この堀切は当城のみならず、同台地上にある鳥名木館も守れる仕組みになっている。おそらく手賀・鳥名木両氏による共同築造で、両氏が良好な関係であったことを示していると思われる。

行方四頭の一つ玉造幹政の次男正家が当地を分与され手賀氏を名乗った。その子孫が手賀城を築したが、いつの時代かは不明である。南方三十三館の仕置きの際、城主手賀高幹は誘殺され手賀氏は滅亡した。(岡田)



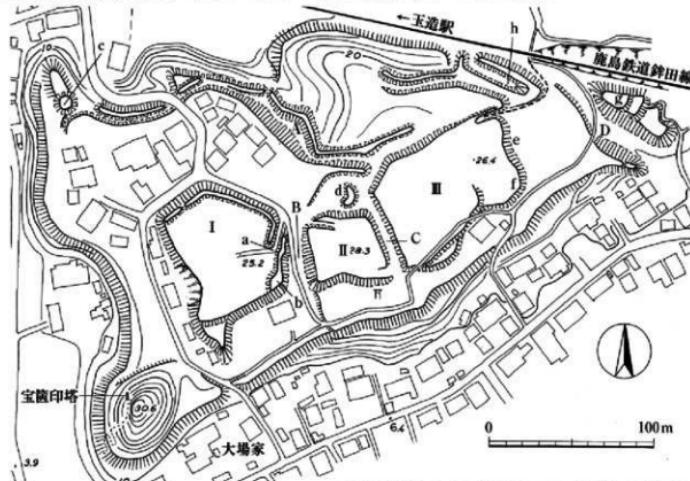
手賀城跡縄張図 余湖浩一(『改茨』より転載)

たまづくりじょうあと  
0937 玉造城跡 行方市玉造 現況：山林、畠地、宅地 別称：瀬の城 地図 59

行方台地西辺縁部、霞ヶ浦に突き出すように半島状台地があり、その先端部に玉造城は築かれている。また、この地点は樅無川が作る広大な谷津の入口に位置する。比高は約20mである。

鹿行地区に多い直線連郭式の丘城で曲輪は三つある。先端の曲輪Iが主郭で半周ほどを土塁で囲まれている。東辺に堀Bから登るように坂虎口が開口している。堀Bを経てその東に曲輪IIがある。曲輪Iより小ぶりな方形で、南東と北西の間に坂虎口がある。堀Cを経て曲輪IIIに至る。曲輪IIIは曲輪IIの三倍ほどの面積があるが土塁はない。曲輪Iの北側は現在民家が立ち並ぶ集落となっているが、この北方も横堀が入っているのでここも曲輪であったと見てもよい。

承平天慶の乱において甥の平将門に討ち取られた平国香の次男、繁盛は常陸大掾に任じられたため大掾繁盛と呼ばれ大掾氏の祖となった。そこから四代目の清幹は那珂郡吉田郷を領したため吉田氏を名乗った。清幹は長男の盛幹には吉田郡を、次男忠幹には行方郡を、三男成幹には鹿島郡を与えた。忠幹の子景幹は四人に所領を分与した。長男為幹は行方氏の惣領を繼いで行方太郎を称した。次男高幹は島崎を領し島崎氏の祖となり、三男家幹は麻生を領し麻生氏の祖となり、四男幹政は玉造を領し玉造氏を名乗り玉造氏の祖となった。この四家は行方郡の中心的勢力として中世を通じて発展していったため、「行方四頭」と呼ばれるようになった。玉造幹政がこの地に入部したのは治承年間(1177-81)とされるが、その時の居館が玉造城の前身になるのかは判らない。玉造城築城の伝承には、寛正5年(1464)であるとか、あるいは、幹政入部以前の嘉応年間(1169-70)に父の宗幹(景幹)によるものであるというものがある。天正19年(1591)の南方三十三館の仕置きにおいて城主玉造重幹は佐竹義宣に誘殺された。これにより玉造氏は滅亡した。その後、玉造城は佐竹氏の管理下に置かれたようであるが詳細は不明である。(岡田)



玉造城跡縄張図 西山洋 2005.11.21 (『改茨』より転載)

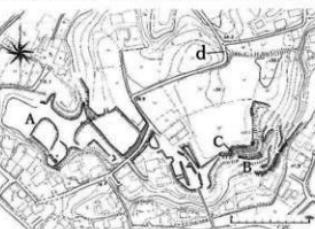
せりざわじょうあと  
0939 芹沢城跡 行方市芹沢 現況：山林、畠地、宅地

地図 59

行方台地の中ほどよりやや西側の半島状台地上に芹沢城はある。恵無川が作る広大な谷津に突き出した形になる。比高は約18m。

破壊が進んでおり遺構の残存状況は悪く、全体の縄張りを把握するのはかなり厳しい。築城のセオリーからすると先端部のAが主郭にふさわしいが、削平が甘く主要な曲輪があったとは思えない。最も遺構が良く残されているのが、城域東側一帯Bである。土塁Cは折れが入り横矢掛けになっている。その斜面は二重の横堀が構築され厳重である。残念なことにこの二重横堀は近年破壊されている。dに当該台地への登り口がある。ここが大手口ではなかったか。

城主芹沢氏は常陸大掾氏の一族であるが、鹿行諸氏に多い吉田系大掾氏ではなく、多気系大掾氏に属する系統である。南北朝時代、多気幹文が相模国の芹沢（現神奈川県茅ヶ崎市芹沢）に移り芹沢氏を名乗った。下って芹沢良忠は大掾満幹の要請に応じ至徳2年（1385）常陸へ帰り、行方郡荒原郷内（後の芹沢）に所領を受ける。その頃、芹沢城が築城されたか。南方三十三館の仕置き（1591）では城主芹沢通幹は難を逃れ秋田氏を頼る。慶長11年（1606）徳川家康に行方郡富田に知行地を与えられ、芹沢に帰郷することとなった。子孫は水戸藩の郷士として活躍した。（岡田）



芹沢城跡縄張図 岡田武志 2021.3.4

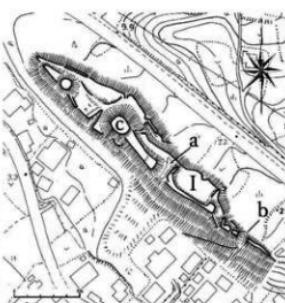
おきすやかたあと  
0940 沖洲館跡 行方市沖洲 現況：山林、畠地 別称：佐竹館

地図 58

行方台地の西の縁が霞ヶ浦に面する場所にあり、いわゆる崖端城である。比高は約28m。園部川が作り出した広大な低地の入口にある。

崖端にいくつかの古墳が並んでおり、これを改造して城館としたものである。長さ約280m、幅約30mの細長い形をしている。通常の城館とは趣を異としていて、居住性は低く籠城はほぼ不可能である。目立つ古墳を物見櫓として利用してしたものであろう。強いて言うならIの平場に土塁があることから主郭と見ても良い。aとbに堀切がありこのあたりは山城の雰囲気がある。最高所のcとそこから南東に延びる細長い平場は前方後円墳（全長約64m）の勒使塚古墳で後円部を物見台にしたものであろう。

当館の歴史等に関しては詳らかではないが、立地、縄張り等から、霞ヶ浦の監視、津の防備のための城館であったことが想像できる。（岡田）



沖洲館跡縄張図 岡田武志 2021.3.7

はにゅうやかたあと  
0941 羽生館跡 行方市羽生 現況：山林、畑地、寺院

地図 59

行方台地の西の縁、霞ヶ浦に面した半島状台地上に築かれた丘城である。比高は約15m。萬福寺西側が城域となっている。

先端部の曲輪Iが主郭でその南北に腰曲輪を持つ。aが虎口で内枡形になっている。堀Bは幅20mほどもあり雄大である。曲輪IIとは細長い土橋で連結されており、この辺は技巧的である。堀Bと堀Cの間には大小四つの曲輪がある。堀Cの東側にも複数の曲輪があるが、どれも削平が甘くなっている。それより東は畑地、萬福寺境内となつていて城郭遺構の確認は難しい。

この地は承安4年(1174)に鹿島神宮大齋宣職中臣則親に寄進された。以後、この地は中臣氏の支配する地域となり、南北朝頃から中臣氏は羽生氏とも呼ばれるようになった。羽生館の城主は明確には判らないものの、この地を代々支配してきたのは羽生氏であることから羽生氏のものと考えるのが自然であろう。「海夫注文」に羽生知行分として「はねうふなつ」があり、水運や漁民までも支配していたことが判る。鹿島神宮の神職ナンバーツーが在地領主、津の支配を兼ね、城郭を構えて武装していたというは稀有なケースではなかろうか。(岡田)



羽生館跡縹張図 岡田武志 2021.3.11

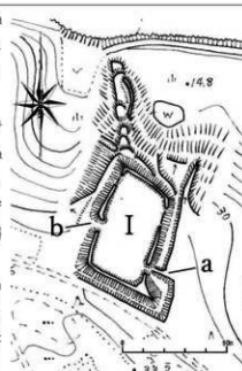
やまとかやかたあと  
0943 山中館跡 行方市芹沢 現況：山林

地図 59

山中館は、行方台地の中央部より西寄り、霞ヶ浦より3kmほど内陸に位置している。幌無川の支流が作る小規模な谷津に面した比高約20mの崖城である。当館の南側は玉造カントリー俱楽部が隣接している。

構造は50m×30mの単郭方形館である。ほぼ全周を土塁で囲まれ、東、南辺は堀を伴う。虎口はa、bの2か所で特にaは土塁の隅を大きく張り出して横矢をかけられるよう工夫してある。谷津に面する北側の斜面は堅土塁や堅堀を駆使して守りを固めている。単純な単郭方形館ではなく隨所に縄張りの弱さを補う造作がされている。

『新編常陸国誌』によれば、「佐々木兵庫助成頼九代孫山中三郎左衛門清定、武州蕨ヨリ下向、コレニ住ス、其後永正ノ頃、山中外記永定アリ、其子外記道定、其子蕨外記守定ハ、實に芹澤土佐守秀幹ノ次子也、其後今ニ蕨ニ住シ、今医ヲ業トシ蕨釣元ト云、家蔵のサシ物アリ」とある。(岡田)



山中館跡縹張図 岡田武志 2021.3.11

と な ぎ やかたあと  
0944 鳥名木館跡 行方市手賀 現況:山林、畑地

地図 59

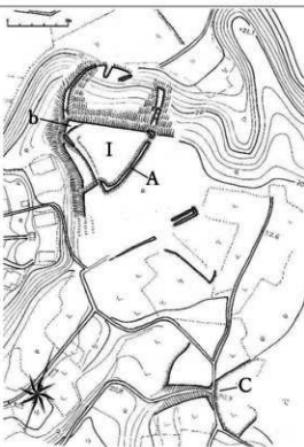
行方台地の西辺縁部近く、やや内陸に入った台地上に鳥名木館跡はある。比高は約 23m。南 620m に手賀城(0938)がある。

小さな先端部にある曲輪 I が主郭で台地基部側に一本の土塁 A がある。西に突き出した部分 b は櫓台跡で、そこからと土塁 A の北端から北に向かって二本の竪土塁が伸びている。曲輪 I の南東側は広大な畠地が拡がり、断片的に遺構があるものの、判断が付きにくい。台地ネック部に堀切 C がある。ここが大手口でこれより北側が城内とみて良さそうである。

鳥名木館は、「鳥名木文書」を相伝してきた鳥名木氏の居城である。鳥名木氏のルーツは二通り伝えられている。一つは平貞盛の弟岡田貞政が鳥名木氏を称し当地に住したというもの。二つ目は永仁年間(1293-98)、手賀氏から分立した淨阿を祖とするものである。

(岡田)

鳥名木館跡縄張図 岡田武志 2021.3.12



お ぬ き やかたあと  
0945 小貫館跡 行方市西蓮寺 現況:山林、寺院

地図 66

小貫館は、行方台地の西寄り、霞ヶ浦湖岸より 1.7km ほど内陸の台地上に築かれた丘城である。半島状台地の付け根付近にあり、東、南面は谷津に面している。比高は約 22m。西蓮寺の境内にある。

主郭は曲輪 I である。かつては a の辺りに堀があつたよう、半島状台地を堀で遮断して 50m × 30m の曲輪を造成していたらしい。西側には横堀 b がある。曲輪 I より溝地を隔てて西 70m に大規模な切通し道 c がある。単なる通路とは到底思えず、城郭関連遺構とみてよいが、あまりの迫力に圧倒されるほどである。城内への登城路の一つであろうか。

「芹沢文書」に「小貫内蔵 小高城主より遣わされ西蓮寺に館を築き住む。天正十九年佐竹義宣の為亡さる」とある。このことと西蓮寺は延暦元年(782)創設と伝わり「常陸高野」と称されるほどの古刹であることから踏まえると、当館をいわゆる城郭寺院と見なすわけにはいかない。西蓮寺の僧が武装していたのではなく、小高城関係者が境内を間借りして築城したもので同時期に両者が共存していた稀有な事例と言える。(岡田)



小貫館跡縄張図 岡田武志 2021.3.19

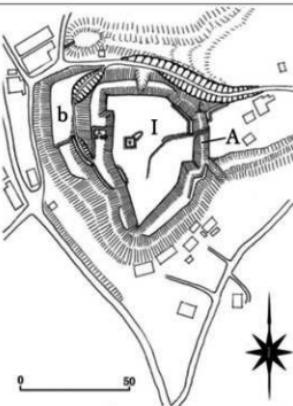
ひとみやかたあと  
0951 人見館跡 行方市井上 現況：山林、墓地

地図 66

人見館跡は、行方台地の西辺縁部、半島状台地先端部上に築かれた丘城である。70m四方ほどのコンパクトな城館である。比高は約25m。南東810mには岡部館(0959)がある。

単郭雑形の構造を持つ。曲輪Iが主郭で南北60m、東西40mほどの規模である。曲輪内の中央よりやや西よりに土壇がある。曲輪面は段差があり、緩やかに凸凹しており削平が甘い。台地基部との切り離しはAの堀切でなされており、そこに土橋がかかって連結されている。墨線には2か所横矢が掛けられている。曲輪Iの周囲は腰曲輪で囲まれ、その一部に土壇があるため、横堀となっている箇所もある。曲輪Iの西側にはもう一段の腰曲輪bがある。

『玉造町史』には「下河辺氏の家臣人見氏の居館」とある。(岡田)



人見館跡縄張図 余湖浩一 2004.10 (『続茨』より転載し加筆)

うこんやかたあと  
0952 右近館跡 行方市藤井 現況：山林

地図 66

右近館は、行方台地の西の縁近く、霞ヶ浦に面した半島状台地上に築かれている。比高は約26m。西北西約420mに岡部館(0959)、南南東約350mに諫訪館(0957)がある。

城域は200m×150mほどで細長い丘を平場にして曲輪を展開させている。土壇や堀はほとんどなく虎口もはっきりせず、平場と段差だけの古い城館的印象を受ける。その代わり切岸の加工はしっかりとしている。最高所の曲輪Iが主郭であろうか。a、bが虎口のようである。曲輪Iの北側に細長い曲輪IIがある。c、dの虎口のようなものは後世の所産であろう。

『玉造町史』では当館を「下河辺氏の居館」としている。また、同書は「下河辺氏は関宿城(千葉県)を失い、飛地であった藤井へ本拠を移した。その後、藤井より舟子へ移って城郭を構え・・・」ともある。当館は藤井にあるので、そのことを指していると思われる。(岡田)



右近館跡縄張図 岡田武志 2021.3.9

わかつねやかたあと  
0954 若常館跡 行方市捻木 現況：山林 別称：若舎人館

地図 59

行方台地の西方、霞ヶ浦側に位置するが、湖岸からは 1.8km ほど内陸にある。小規模な舌状台地上先端にあるもの、比高は 12m ほどしかない。

城域は 50m × 50m ほどでコンパクトな单郭構造の城館である。本来、台地基部とは 1 条の土里 A で区切られていたようであるが、半分ほど湮滅している。東辺先端近くだけに 20m ほどの横堀 B が残り、西側斜面には堅堀 C がある。I 曲輪の外側の斜面は切岸加工が全くされておらず、緩斜面のままである。

万葉集に当地域出身で防人の若舎人部広足の歌が二首掲載されている。その歌碑と説明板が若常館近くに設置してある。中世の史料には、若舎人氏の名が散見されるが、それが広足の子孫かどうかは不明である。『玉造町史』では中世若舎人氏は行方氏の庶子家と推定している。中世若舎人氏は若舎人郷を領しており、この地に若常館以外に城館はないので、当館は中世若舎人氏の居城として見てよい。(岡田)



若常館跡縄張図 岡田武志 2021.3.15

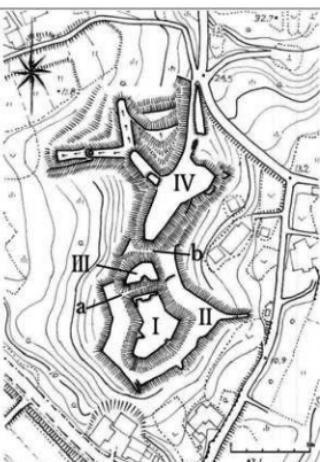
す わ やかたあと  
0957 諏訪館跡 行方市藤井 現況：山林、神社

地図 66

行方台地の西の縁、霞ヶ浦に面した半島状台地上に築かれた丘城である。比高は 26m。南東約 930m に船子城(0906)、北北西約 420m に右近館(0952)がある。

城域は南北 180m、東西 120m で半島状台地の全域を城館として普請してある。曲輪 I が主郭で南端に諏訪神社が建立され、北辺は土塁が残る。曲輪 II は曲輪 I・III を包むように展開する。曲輪 III は堀 b と繋がっている。曲輪 IV は曲輪 I の北側に堀 a を隔ててあり、面積が狭く居住性は低いので、曲輪 I を守る馬出のような用途を想定できる。曲輪 I と曲輪 III は本来一体であったものをより防御性を高めるためにこのように改造したのではないかろうか。堀 b を隔てて曲輪 IV がある。面積は広いものの土塁等ではなく防御性は低い。

諏訪館の歴史等については不詳である。居住性が高くしっかりした造りであることから、在地領主の居城を想定できる。(岡田)



諏訪館跡縄張図 岡田武志 2021.2.27

おかべやかたあと  
0959 岡部館跡 行方市井上 現況：山林、畠地、宅地

地図 66

岡部館は、行方台地の西の縁、霞ヶ浦に面した舌状台地上に築かれた丘城である。比高は約29m。南東430mに右近館(0952)、北西820mに人見館(0951)がある。

城域は130m×100mほどで平坦面は広い。しかし、改変が激しいのか土塁や堀は見当たらず曲輪の区画も判らなくなってしまっている。目立つaは古墳で頂上に三等三角点が設置されている。おそらくこれは霞ヶ浦方面的監視を行う櫓台として利用していたものであろう。古墳の東側には腰曲輪群bが展開している。城館の旁開気が乏しい当館で最も城らしい遺構である。なお、斜面の大半は丁寧に切岸加工されている。

岡部館の歴史等について詳らかではないが、『玉造町史』では「下河辺氏の家臣岡部氏の居館」としている。(岡田)



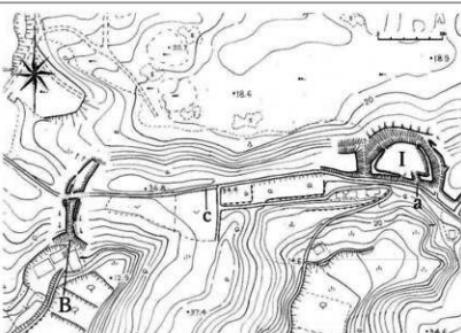
岡部館跡縄張図 岡田武志 2021.3.16

なかつぼじょうあと  
0960 中坪城跡 行方市山田 現況：山林

地図 67

行方台地の東側、北浦に近い台地上に築かれている。北浦湖岸より700mほど内陸で、山田川の河口付近でもある。南430mには山田城(0923)がある。

台地が細くくびれた場所に半円形の曲輪Iがある。曲輪Iの北面以外は土塁に囲まれている。aは虎口である。東隣、西隣に堀切を設けて尾根筋からの分断を図っている。曲輪Iより西260mにも台地ネック部に堀切Bがあり、麓まで掘り込んだ堅壁となっている。堀切



中坪城跡縄張図 岡田武志 2021.2.26

Bと曲輪I付近には関所が設けられていたはずで、まず堀切Bで敵の侵攻を食い止め、それが突破されても曲輪Iで閉塞する二段構えの戦略が窺える。

歴史については不明であるが、近くに山田城があることと、cの道を東進すると山田城へ至ることから、山田城を守る支城の一つとみていい。おそらくこの道は山田城への大手道だったと思われ、当城はそれを遮断する街道閉塞城郭であったはずである。(岡田)

たかおかじょうあと  
0961 高岡城跡 行方市北高岡 現状：山林、畠地

地図 67

高岡城は、行方台地の中ほどよりやや東側に位置する。山田川が侵食してきた谷津に突き出した二本の半島状台地上に築かれた丘城である。両者とも比高は29mほどである。現在、東関東自動車道建設のため、西遺構の西側半分ほどが湮滅している。

両者とも耕作が進んだせいか曲輪の判別がしにくい。東遺構は堀cによって台地基部との分断を図り、更に堀cは南に延びて横堀となっている。西遺構は東遺構と同様に谷津側に横堀eが構築されている。

「畠田旧記」に天正14年(1586)「九月四日、玉造符内衆引越、武田洞中悉く打ちらし申候、玉造衆武城きりとれ打死、高岡のこやにて武衆悉く打死ニ候」とある。高岡城は武田氏の城館で、玉造・大掾連合軍に攻撃を受けたことが判る。また近隣に山田氏、小幡氏の居城があり、山田川対岸の旧南高岡村は中城に拠った下河辺氏の所領であるので、高岡城は武田氏の境目の城だった可能性が高い。(岡田)



高岡城跡縄張図 2016.2.19 『改茨』より転載)

あおうじょうあと  
0963 栗生城跡 鹿嶋市栗生 現状：山林、畠地ほか 別称：花山城、香山城 地図 75

栗生城跡は、鹿島台地南端の標高約30mの舌状台地の突端付近に位置する。戦時に神之池海軍航空基地の建設のため、また昭和50年ごろの鹿嶋開発による土砂採取で大部分が湮滅し、現在は内御城の一部が残るのみである。小字から、「御城」・「内御城」・「外城」などは城のあった場所、「根古屋」・「中ノ間」等は栗生城の関係のある者が住んでいたと考えられている。御城などがあった場所は、削平され詳細は不明であるが、地元の方の聞き取りでは、大東亜戦争前までは内御城と外城との間に堀があり、更に内御城側には高さ4m、上幅2m、底幅4mの土塁が残っていたということである。これらから推察するに林外城のような曲輪形態だったと思われる。

某家の記録によれば、当国市森長者の子で、豊浦左近少輔光実という者が、初めて城を築き、花山城といい、付近の沼谷原を開発して住んだといわれている。その後、鹿島城主三代宗幹の第二子幹實(栗生七郎)が修築して居を構えて栗生氏と称したと伝えられる。(内田)

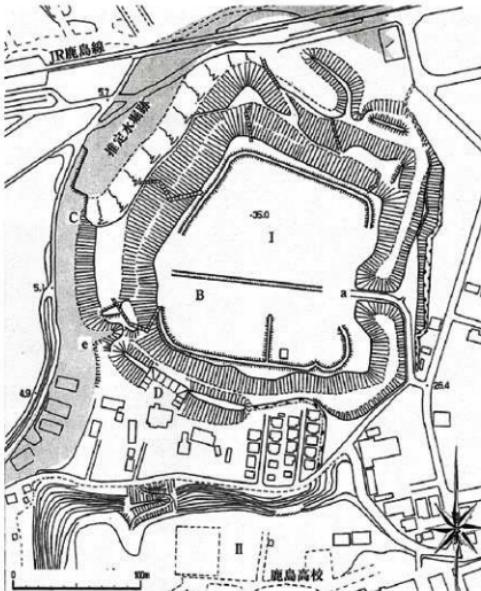


栗生城跡縄張図 岡田武志 2021.2.20

鹿島城跡は、北浦から鷲川へ変わる左岸の標高約35mの鹿島台地西端に位置する。鹿島城跡の北側、現在の国道51号線・JR鹿島線が通る低地部分は「館ノ内」「館ノ腰」と呼ばれ、緑ヶ丘の西部に「堀合」と呼ばれる小字がある（現在の緑ヶ丘付近）。

本曲輪は、舌状台地突端部分の東側基部を空堀で分断し、曲輪内部は土塁と堀により区画されている。曲輪IIは現在の茨城県立鹿島高校付近とされ、曲輪II南側、現在の旧国道51号線の通りは、船津道堀、大辻堀で区画されている。曲輪II東側は角内後堀で区画され、曲輪II東側には射の馬場があり、その北側に護国院、神宮寺（現在湮滅）が配される。船津道堀と大辻堀の間、現在の鹿嶋市立鹿島小前交差点付近に大手門があったとされる。

鹿島城は、常陸大掾氏族鹿島氏の居城とされ、初代成幹の子政幹が、治承5年（義和元年1181）に源頼朝から鹿島社惣追捕使に任命された頃の築城とされる。鹿島義幹によって大永3年（1523）に大改修が行われる。天正19年（1591）佐竹氏の家臣・町田備中守勢に攻められ落城した。その後慶長元年（1596）、鹿島宮中屋敷割りが行われ、鹿島城も修理され、領主東義久代官の居城となる。承応元年（1652）4月、神宮大宮司の鹿島則広が徳川幕府に請願し堀を埋めて、新たに町を開いたことから、新町、新坂等ができた。（内田）



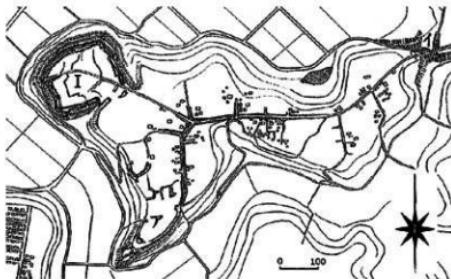
鹿島城跡縄張図 岡田武志 2004.12.30 (『改次』より転載)

りゅうかいじょうあと  
0966 竜会城跡 鹿嶋市山之上 現況：山林 別称：流海城

地図 74

竜会城跡は、北浦に注ぐ水神川の左岸の標高約30mの鹿島台地の舌状台地突端部に位置し、北側に田谷沼を望む立地である。舌状台地西側の突端部分に周囲を土塁で囲む曲輪が残る。曲輪の東側に堀切が残るが、途中までしか掘られていない。土塁の内側に武者走りを配し、戦国末期の様相を呈する。伝承によれば鹿島氏が戦国末期に築き始め、築城途中で放棄されたものとされ、現状の遺構残存状況からもこのことが裏付けられる。

また、台地東側の基部イのところはかつて堀切状を呈し、遠堀の可能性が指摘されている。沼尾彌十郎の居館跡と伝えられるが、資料がなく詳細は不明である。また、アのところは低い土塁状の遺構はあるが、明確な城郭遺構はない。(内田)



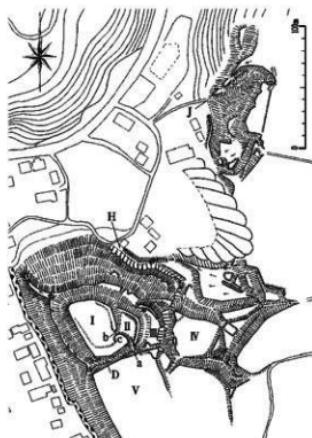
竜会城跡縄張図 余湖浩一 2016.10 (『続茨』より転載)

つかはらやかたあと  
0967 塚原館跡 鹿嶋市沼尾 現況：山林、畑地 別称：塚原城

地図 74

塚原館跡は、北浦に注ぐ水神川の右岸鹿島台地西端の標高約35mの台地西端に位置する。北・西側は急峻な崖地で、北東側に谷地が入る。舌状台地先端部に曲輪Iを置き、その東側に一段ずつ下がるように曲輪II・III・IVを配する。曲輪I～IIIの南側に幅約9.7m、深さ4～5mの空堀が東西方向に延び、その南側は平場が構築されている。曲輪I・IIは南東側の虎口で繋がり、虎口の南側の土塁は櫓台が置かれていたと考えられる平場が見られる。また、aの個所に橋脚台状遺構があり、ここに木橋が架けられていたと見られる。平成21年度から27年度にかけて発掘調査が行われ、確認された遺構や遺物の時期は15世紀半ばから16世紀後半とされている。塚原館は鹿島氏の配下である塚原土佐守の館とされているが、文献資料等もなく不詳である。塚原ト伝（塚原土佐守安幹の養子）の居城とも伝えられ、ト伝が城経営にあたっていた時期と出土遺物などの時期が重なることから、塚原氏の関わる城として重要な館跡である。

鹿島城主 15 代義幹の第4子塚原新兵衛安重から4代約200年間続いたとされる。(内田)



塚原館跡縄張図 岡田武志 2015.1.5 (『続茨』より転載)

みょううちのやかたあと  
0968 明地野館跡 鹿嶋市中 現況：公共施設ほか

地図 67

明地野館跡は、北浦から入り込む樹枝状に開析された支谷奥の台地標高約38mの舌状台地の突端付近に位置する。本跡の西約1kmのところには立原城（0971湮滅）が所在する。東西42m、南北56mで平行四辺形状に土塁が巡り、西側の土塁中央部に虎口を形成する。土塁外側には空堀が巡り、幅約1m、深さ約50cmを測る。土塁内側の北側個所に東西16~18m、南北9m、高さ20~30cmの高まりが確認されており、建物跡が想定されている。

明地野館のはか中地区には、丸屋形崎、柴崎にも館があったと言われ、明地野館は袴塚主計の館跡とされる。（内田）



明地野館跡縄張図 岡田武志 2021.1.26

あかやまやかたあと  
0974 赤山館跡 鹿嶋市和 現況：山林 別称：赤山砦

地図 67

赤山館跡は、北浦に注ぐ石川の左岸に広がる開析谷の南端部台地上に位置する。標高約32mの西側に延びる舌状台地突端部に立地し、谷を挟んで北側に塙館跡が所在する。南側の水田からの比高差は約26mである。

大野村史では土塁が三重に巡るとあるが、現地踏査の結果、頂上部に土塁が巡るだけである。東側に虎口が設けられ、尾根上に台地へと通る道があったと考えられる。また、土塁内部に遺構はなく、館というより砦的な機能の構造である。（内田）



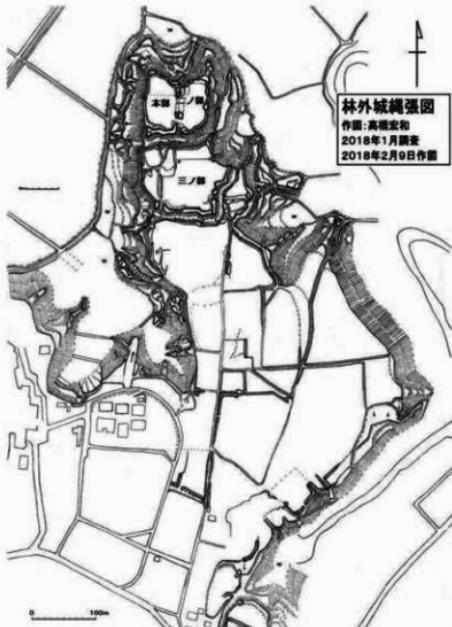
赤山館跡縄張図 岡田武志 2021.1.26

林城跡は、北浦に注ぐ中里川左岸の北画に張り出す標高約36mの舌状台地上の突端に位置する。曲輪は、台地突端部北側にI及びIIをそれぞれ西と東に配し、周囲を土塁で囲む。その南側には幅約20m、深さ約7mの大規模な堀が東西に延びている。曲輪IとIIの間には、土塁によって区画され、曲輪Iの南東側隅部の土塁は、一段と高くなり幅も広がることから櫓のような建物があったと考えられる。大堀を挟んで南側には曲輪IIIが置かれ、広い曲輪内には高さ1mほどの土塁などで区画されている。曲輪IIIの南西部には虎口があり、堀を挟んで南側の平地へと続いている。また、南東部にも南側の平地には遺構のようなものが見られるが明確に城郭関連遺構かどうか判然としない。この曲輪IIIの南側の堀を挟んですぐの平地で発掘調査が行われたが、中世に関連する遺構は段切り状遺構、土壙13基な

どが確認され、その他は縄文時代や古墳・奈良・平安時代の遺構が確認されている。調査区外に置かれていた近世墓石に「前東醫寺」と銘文があり、林城から北約3.7kmの立原地区に現在東醫寺があり、関連性が指摘されており、曲輪IIIの南側平地には寺院などの存在が考えられる。

林地区には、林城のほかに谷を挟んで北側の台地に林中城(0970)がある。詳細は「林中城跡」で記載するが、林城は小字で外城とあり、林中城は小字で中城とあり、関連性が指摘される城館跡である。しかしながら立地条件として、林城が林中城に対して対峙するような配置、林城と林中城では普請技術の違いが見られることから、林城は、林氏以外の別勢力によって築城されたことが考えられ、その場合天正年間に鹿島氏の内紛に介入した江戸氏の陣城、もしくは天正19年(1591)以降に東義久が建てた拠点城の可能性が指摘されている。

林氏は、天正17年(1589)札村において荒原五郎左衛門というものに殺害され、断絶した。位牌は、林城から北約1kmのところに所在する大林山瑞雲寺(菩提寺)にある。(内田)



林城跡図 高橋宏和 2018.2.9

林中城跡は、林城跡(0969)の北側約 200m の谷を挟んだ標高約 35m の舌状台地上の南端部に位置する。3 方向を谷に囲まれ、北側で堀を挟んで台地上の林地区集落につながっている。集落は標高約 35 ~38m で、林城と同じく東西及び南側は谷に囲まれ、北側で台地とつながる。

本城の曲輪 I は民家の敷地として使われていたため一部改変が見られるが、周囲を土塁で囲み、南側に曲輪 II につながる箇所があり、そこから西側と東側で段差により区画が見られる。この東側の曲輪は I に沿って帯曲輪上に回っている。曲輪 II の周囲にも土塁が見られ、その下の斜面には竪堀も見られる。北側の台地と区画する堀は、集落への道とつながり、堀底道として機能した可能性が指摘される。本城の北側に広がる林集落は、周囲を最大幅 6m の大きな横堀状造構が巡っている。集落を通る道が北側でク

ランクする個所があり、そこには高さ 4m の土塁があり、木戸跡と推定されている。この集落内には「美ノ坪」「羽場」「北ノ内」「根山」「庭月」など城郭に関連する地名が散見する。このうち「美ノ坪」は林氏の最初の居館であった可能性が高いことが指摘されている。また集落の地割から正方形のものが多く、武家地系宿として展開し、周囲を土塁・空堀などで区画する構造的な様相が見られる。

林中城は、札城(0891)や中居城(0892)などの鹿行地域にみられる城郭構造と似ており、林氏の居城として林中城が本拠地であろうとされている。

林氏は常陸大掾平氏の鹿島一族の有力庶子で、鹿島成幹の六男頼幹が林氏を興し、「吾妻鑑」に「鹿島六郎」とあり、頼朝に仕え、京都や鎌倉で活躍したと伝えられる。(内田)



林中城跡縄張図 高橋宏和 2018.2.18

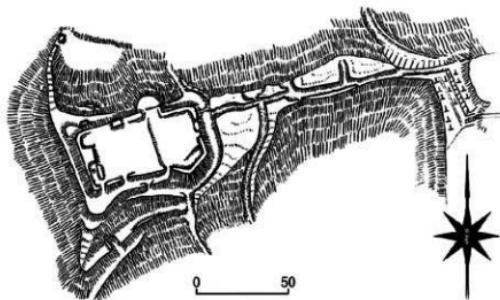
たてのみややかたあと  
0975 梶の宮館跡 鹿嶋市立原 現況：山林、宅地、雑種地

地図 67

梶の宮館跡は、北浦に面する鹿島台地西側の舌状台地上標高約37mのところに位置する。谷を挟んで南側の台地先端部には立原城（0971 湿減）が所在する。西側の水田からの比高差は約32mである。東側の台地基部は両側を急峻な崖になっており、そこから100mほど切岸状の尾根上に西側へ進むと幅6mほどの堀切があり、その先に東西約60m、南北約30mの周囲を土塁で囲まれた長方形の曲輪がある。北東及び北西、南西角に腰曲輪状の平場がある。曲輪内の中央部から西側は一段高くなっている。西側の土塁中央部には方形の張り出し部が見られる。

立原氏の居城と考えられる立原城の北側に位置し、伝承等は無いが、立原氏の出先の館として築かれたものと考えられる。

（内田）



梶の宮館跡縄張図 余湖浩一 2000.3 (『続茨』より転載)

つがじょうあと  
0976 津賀城跡 鹿嶋市津賀 現況：公共施設ほか

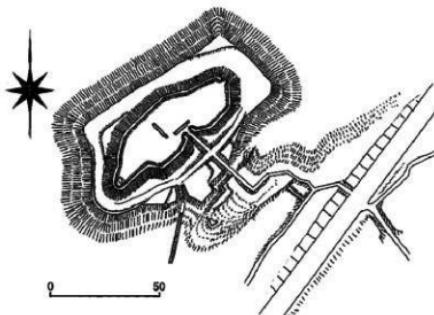
地図 67

津賀城跡は、半島状に北浦に向けて北東方向に突き出す標高約33～36mの台地に所在する。谷を挟んで東南東約700mには赤山館（0974）が位置する。

本曲輪は西側の台地突端に立地し、不正橢円形を呈する長径90m、短径25～35mの土塁に周囲を囲まれ、その外側には幅8mほどの帯曲輪が巡る。南西部に長さ20m、幅3～4mほどの堅堀がある。南東側に虎口があり、土橋、堀切に続いて、曲輪II、曲輪IIIが配される。

津賀城は、津賀氏の居城とされているが、津賀氏については、系図等は不明である。『津賀津福寺過去帳』に津賀津福寺、『鹿島治乱記』に津賀大膳、津賀大炊の名が見られる。また『烟田旧記』には「大炊正殿、津賀の要害を出て、江戸の東福寺へ行く」(天正10年(1582))という記述があり、この要害が津賀城と考えられる。

（内田）



津賀城跡縄張図 余湖浩一 2014.12 (『続茨』より転載)

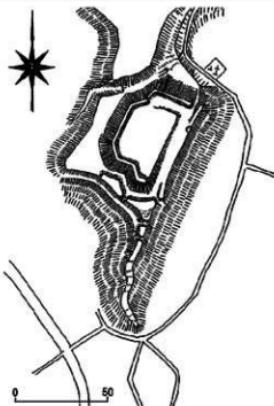
つがやかたあと  
0977 津賀館跡 鹿嶋市津賀 現況：山林

地図 67

津賀館跡は、津賀城の北西約420mの舌状台地上標高約32mに所在する。

台地基部に深さ8mほどの堀切が掘られ、曲輪と台地を大きく分断している。曲輪は単郭構造で虎口は北側と南側に設けられている。本曲輪の北・南・西側には土塁が巡り、西側に帯曲輪が広がる。南側は細い尾根状になり二重の堀切がある。

津賀館については、詳細が不明であり、津賀氏初期の居館、額賀氏の居館とも言われている。津賀城の出城として機能していたことも考えられる。(内田)



津賀館跡縄張図 余湖浩一 2004『続茨』より転載

たけいじょうあと  
0978 武井城跡 鹿嶋市武井 現況：山林、畑、宅地

地図 67

武井城跡は、北浦から入り込む谷津に突き出す標高約32mの台地上に位置する。台地先端部を方形に造成して築かれており、その規模は南北約100m、東西約200mの範囲に及ぶ。

北側の低地から台地上にあがる道は堀跡と考えられ、その西側に曲輪I、東側に曲輪IIがある。台地縁辺部を中心にして3次元微地形測量調査が実施されており、北西・南西・南東の3辺を巡る高さ2~3mの土塁や切岸、切岸南東面の帯曲輪や堅堀等の遺構の存在が確認されている。また、南西切岸面中央部には堅堀を正面に有する平虎口aがみられる。城主は中居氏との伝承もあるが詳細は不明である。(加藤)



武井城縄張図 岡田武志、内田勇樹、加藤千里 2021.2.16

かぶとうじょうあと  
0979 甲頭城跡 鹿嶋市武井 現況：山林 別称：武井城、兜城

地図 67

甲頭城跡は、北浦に注ぐ石川の上流約 1.4km の右岸に小さく張り出す舌状台地上標高約 34m のところに所在する。東・西・南が谷津に囲まれ、北側が台地と繋がるところであり、細く括れ、その個所西側に堅壁が切られている。また、その南側に二重の土塁が配され、食い違いの土塁によって虎口が築かれている。単郭構造で、土塁によって囲まれている。土塁南側には、腰曲輪が配される。

『大野村史』では武井城と紹介され、武井には「甲頭」と「古屋」に城跡があると記載されている。「甲頭」は甲頭城、「古屋」は武井城(0978)である。「古屋」には、「かじや井戸・切通し・切が柵・楯の下・物見やぐら跡」の地名と「出し」「入り」「内小屋」の屋号が残る。また、塚原ト伝の門人に甲頭刑部少輔というものの、さらに、中居氏の家臣に加布藤美乃というものがおり、武井村に住す、と記録があることから、甲頭氏の居城であると考えられる。(内田)



甲頭城跡縄張図 遠山成一 2017.3.5 (『続茨』より転載)

しきじょうあと  
0980 志崎城跡 鹿嶋市志崎 現況：山林

地図 67

志崎城跡は、北浦に注ぐ上幡木志崎境川の左岸の台地西端部標高約 33m のところに位置する。単郭構造で、東側に堀切を配し、台地と区画している。主郭の北・東・西側には土塁が築かれ、南側は急峻な切岸になっている。一方北西側は緩やかな傾斜のため帶曲輪を設けている。この帶曲輪は西側の先端側で狭まり、先端部分で横堀を呈している。この横堀を挟んで西側に三日月状の腰曲輪を配する。また東側の堀切の南端部で台地につながる部分があり、虎口と考えられる。

志崎城は詳細が不明で、城主等は不明である。規模としてもそれほど大きなものではなく、構造も比較的単純であること、北約 2.4km のところに中居城(0892)、南約 1.3km のところに武井城(0978)が位置することなどから、これらと関連する城館、砦的な役割とも考えられる。(内田)



志崎城跡縄張図 岡田武志 2021.1.22

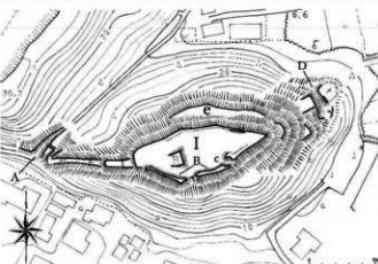
おたべじょうあと  
0981 小田辺城跡 鹿嶋市中 現況：山林、神社

地図 67

鹿島台地の西の縁、北浦に突き出した台地上に築かれた丘城である。水田面からの比高は約30m。

堀切 A によって台地から切り離し、独立化した丘上を平坦にしたシンプルな構造である。単郭構造で曲輪 I が主郭である。東西に細長くサツマイモのような形で長軸は約 100m ある。曲輪 I 南面には土塁 B が築かれている一方、北面は土塁がない。c に耕形がありここが虎口であったと思われるが、蔽のため麓へ通じる通路は確認できなかった。曲輪 I の東はいくつかの腰曲輪と堀切 D によってこの方面より登ってくる敵に備えている。曲輪 I から西へ延びる細尾根は神社への参道となっているため、多少の改変はあるであろう。曲輪 I の北側には細長い腰曲輪 e がある。

史料や伝承が全くないため、城主や築城時期は不明である。北浦へ突き出した台地上に築かれている点や、シンプルな縄張りからして、地元領主の居城というよりも北浦監視のための城館であったと推測できる。(岡田)



小田辺城跡縄張図 岡田武志 2021.2.1

なかじょうあと  
0982 中城跡 鹿嶋市中 現況：山林、畠地、宅地、農地、雑種地

地図 67

北浦に面する鹿島台地の西側に位置するが、縁辺部ではなくやや内陸に築かれた丘城である。周囲の水田面からの比高は約 36m を測る。東西約 1.2km、南北約 660m と広大な面積を誇る。現在の中集落全体が中城の城域だったと思われる。台地上はほぼ平坦である。

中集落内にいくつもの土塁が散見されるものの、元の姿を復元するのは難しい。a-b の道路の両脇に土塁があり、かつ南北の先端は谷津に向かって堅堀状になっているので、この道は本来堀だったと思われる。また c-d の道は周囲より掘り込まれ、かつ台地のネック部であること、c より谷津へは堅堀状になっているため、この道も本来は堀であったのではなかろうか。c-d の堀より西側が城域でその西端は e-f あたりか。

当城の歴史等についてとは不詳であるが、林氏の庶流で中を領した中村氏の居城は確定しておらず、この中城がその比定地候補としても良いのではないか。(岡田)



中城跡縄張図 岡田武志 2021.1.28

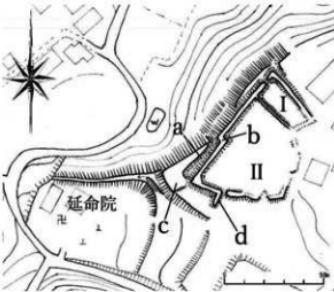
にいじょうあと  
0983 新城跡 潮来市大生 現況：山林

地図 74

行方台地東側の縁、北浦の西岸に面した台地上に築かれた崖端城である。台地の突端ではなく谷津の奥まった場所に位置する。比高は約25m。谷津を挟んで向かいの半島状台地上には鳳凰城(0948)、大生様屋敷がある。

南北80m、東西60mほどのコンパクトな城館で曲輪は二つ確認できる。城域の東側は破壊されており不明瞭である。I、IIどちらが主郭であるか判らない。横堀a、横矢掛けbがあることから戦国時代末期に機能していたことが判る。cは櫓台、dは不完全な外堀形虎口である。

史料、伝承がないため、歴史等は不詳であるが、「新城」という名から旧城より新たに築造された城館であることが想像できる。旧城にあたる城館は不明なもの、すぐ近くに大規模な鳳凰城があり、当城の南西に隣接する延命院には鳳凰城主大生殿家墓所があることから、それらに関連する城館であったかもしれない。(岡田)



新城跡縄張図 岡田武志 2021.1.13

おおだいじょうあと  
0986 大台城跡 潮来市堀之内 現況：公共施設ほか 別称：堀之内大台城 地図 74

大台城は行方台地の西縁辺部よりやや内陸に位置し、常陸利根川から約1.4km東側にある。現在、牛堀中学校、ソーラーパネル等となり遺構は消滅している。南東1kmに島崎城(0985)がある。

半島状台地上に三つの曲輪を配置した準直線連郭式城郭である。三つの曲輪はどれも土塁込みである。特徴的なのは、各曲輪が隣接しておらず50m以上離れていることである。曲輪間の連絡にはくねくねした細長い通路が用いられており、その通路には頭上から攻撃できるよう多くの腰曲輪が配置されている。曲輪I・II間は拵形が構築され特に厳重である。曲輪I内部の窪みは庭園の跡である。

天正19年(1591)の南方三十三館の仕置きにて佐竹義宣は鹿行諸氏を一気に葬り、その領地を我がものとした。行方郡支配の拠点として築城されたのが大台城である。築城開始は文禄4年(1595)で慶長元年(1596)に完成した。城主として家臣小貫頼久が送り込まれた。佐竹領最南端に近いこの地は、香取海を隔てた対岸は鳥居元忠が守る徳川領であり、国境にあたる。当城はいわゆる境目の城であり、當時最新の築城技術を導入した前線基地と言える。慶長7年(1602)、佐竹氏の国替えによって大台城は廃城となった。(岡田)



大台城跡遺構確認測量図（堀之内大台城発掘調査団1986より転載したものに加筆）

しまざきじょうあと  
0985 島崎城跡 潮来市島崎 現況：山林、畠地、宅地、神社

地図 74

行方台地の南端近く、夜越川の支流が侵食した谷津に突き出す舌状台地上に築かれた丘城である。周囲の水田面からの比高は約26mである。北西1kmには大台城(0986)がある。

城域は380m×270mで比較的広大である。舌状台地先端に主郭である曲輪Iを置き、台地基部に向かって下位の曲輪を配置する直線連郭式の形式を持つ。曲輪Iは北辺と南辺に土塁が残る。aはありふれた平虎口ではあるが、虎口前面に小空間bを設け、導線をクランクさせているので、bを含めた拝形虎口と見做すことが出来る。bの北側に曲輪IIがある。こちらも虎口をbに開口させている。曲輪IIは東辺を除いて土塁で囲まれている。曲輪IVは曲輪IIの北側に堀を隔てて配置され、半周ほどを土塁で囲まれている。興味深いのは曲輪IIとの連絡路cである。曲輪の角にあたる部分に土橋をかけたもので、曲輪II・IVの虎口にあたるが一般的に角部分は守備に不利なので避けられるべきものである。曲輪IVの北側に二重堀を隔てて曲輪Vがある。この二重堀は特に厳重で砂岩になりかけの地山を大きく掘いたものでその斜面は垂直に近い。曲輪Vは東西に細長く、当城で最も面積の広い曲輪で、北辺に土塁が残る。更にその北側に長大な堀を構築して台地基部との分断を図っている。

島崎城築城の時期は諸説あるものの定かではない。平安時代末期、行方郡一帯を支配したのは大掾氏一族の行方景幹であった。彼の死後、その領地は4人の子供に分与された。長男為幹は行方氏の惣領（後に小高氏）、次男高幹は島崎、三男家幹は麻生、四男幹政は玉造を領し、それらの地名を名字にして、各々の支族の祖となった。四家は中世を通じて行方郡の中心勢力であり続けたため「行方四頭」と呼ばれた。当初、四家は惣領の行方氏（小高氏）を中心に島崎、麻生、玉造の三家が支援する体制をとり行方郡支配を盤石なものにしていったが、戦国時代になると互いに争うようになる。四家のうち最も領土拡張路線を探ったのが島崎氏で、同族の長山氏、麻生氏を滅ぼし版図を広げた。天正17年（1589）には小高氏居城の小高城をも攻撃した。天正19年（1591）の南方三十三館の仕置において当主島崎安定は佐竹義宣に誘殺され島崎氏は滅亡した。その後、島崎城は佐竹氏の管理下に置かれたが、近くに大台城を築城したため、廃城となった。（岡田）



島崎城跡縄張図 余湖浩一（『改変』より転載し一部加筆した）

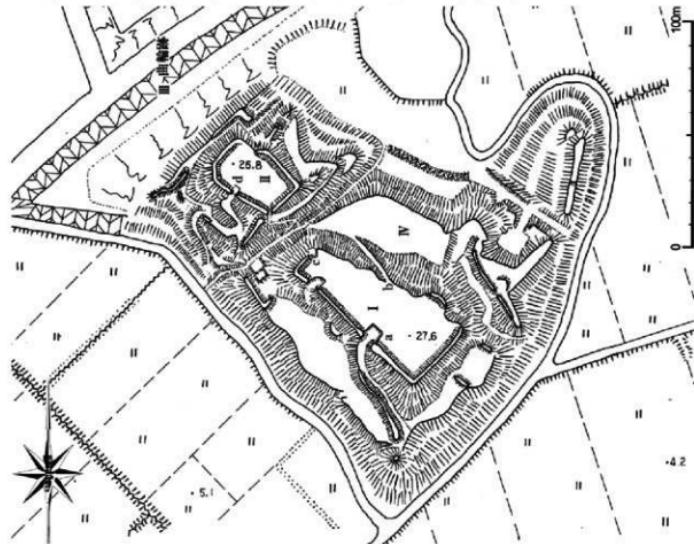
ながやまじょうあと  
0987 永山城跡 潮来市永山 現況：山林、公共施設ほか 別称：長山城

地図 74

永山城は、夜越川が行方台地を侵食してきた谷津に突き出した半島状台地上に築かれている丘城である。比高は約21m。南東2.4kmに島崎城(0985)がある。

三つの曲輪を直線的に配置した直線連郭式城郭である。曲輪IIIは「かすみの郷公園」建設によって湮滅しているが他は保存状態が良い。台地先端部の曲輪Iが主郭で長軸約70mの細長い形をしている。bは坂虎口となっておりIV曲輪から攻め登ってくる敵兵に横矢が掛けられるようになっている。aは舟形虎口となっており一段下の腰曲輪に降りられるようになっている。これは搦手口であろう。cに虎口のような段差があり、ここから曲輪II方面へ木橋がかかっていた可能性がある。曲輪Iの北西に台地を分断する堀がある。その堀の北西に曲輪IIがある。曲輪IIは長軸約40mと小ぶりながらほぼ全周を土塁で囲まれ、その周囲には腰曲輪、横堀、堅堀が構築されこちらも厳重である。dは内舟形虎口でそこから麓へ降りるつづら折りの通路へと繋がる。曲輪IVの東及び北西にも遺構が残る。平坦面が狭く居住性は低いので曲輪ではなく、城の北・東方を監視する櫓台のような施設ではなかったか。

常陸大掾氏の支族行方幹平の次子行方与一郎知幹がこの地を領し長山氏を名乗ったのが端緒で、詳しい築城年代等は判っていない。天文2年(1522)、10代幹綱の時、近隣で同族の島崎城主島崎安国に攻められて落城した。攻城の際、永山城の東側を流れる川を越えて夜襲を仕掛けてきたことから、その川の名は夜越(よろこし)川となったと言われる。(岡田)



永山城跡図 岡田武志 2004.3.14 (『改茨』より転載)

とよたじょうあと  
0989 豊田城跡 神栖市萩原 現況：水田、寺院 別称：花ヶ崎城跡

地図 82

豊田城跡は、常陸利根川左岸の低地、標高約3.8mのところに位置する。

現在、淨動院というお寺の境内地になり、東側の一部を除いて周囲を土塁で囲む。土塁の西側及び東側は周辺の標高と比べ1.8mほど低く堀跡が残っていたが、現在は埋め立てられている。

香取神宮文書「応安海夫注文」によると、花ヶ崎氏は室町時代に「はなかさきの津」を知行していた。光仁天皇の子孫であることから常陸大掾氏の一族と考えられ、この場所に居館があったとされるが、天正19年(1591)佐竹氏によって滅ぼされた。(内田)



豊田城跡縄張図 西山洋 2016.12.19 (『続茨』より転載)

いしがみじょうあと  
0990 石神城跡 神栖市石神 現状：水田、畠地、宅地、寺院

地図 82

石神城跡は、常陸利根川左岸の低地、標高約2.5mのところに位置する。

現在は、花光院というお寺の敷地内になり、周囲に土塁と一部東側に堀が残っている。

香取神宮文書「応安海夫注文」の中で、「たかはまの津石神知行分」と記され、現在の地名を苗字とする鹿島一族の石神氏が居館を構え、早くから港津、水田耕地の開発が進められていたと考えられる。応永15年(1408)の鹿島憲幹の神宮領横領事件に連座して知行を没収され、同22年(1415)に疑いが晴れ知行地は返還されたが、弘治4年(1558)、同じく鹿島一族の栗生氏と争いを起こし、最終的には両氏とも滅亡したと伝えられる。

(内田)



石神城跡縄張図 西山洋 2016.12.19 (『続茨』より転載)